



両長谷遺跡発掘調査報告書

平成 8 年度

倉吉市教育委員会



りょう なが たに

両長谷遺跡発掘調査報告書



遺跡略号 4DKR

平成 8 年度

倉吉市教育委員会

<10>0100572585

序

この報告書は、産業廃棄物処分場造成に伴う事前調査として、平成7年度に倉吉市国府字両長谷において実施した埋蔵文化財の発掘調査の記録であります。

近年、本市における開発工事は大規模なものが多く、これに伴う埋蔵文化財の調査も規模の大きなものとなっております。今回調査いたしました両長谷遺跡は弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺跡です。残念なことに果樹園経営による大きな搅乱を受けており遺構の残りが非常に悪い状態であるものの、古墳時代終末期における小型の横穴式石室をはじめ装飾須恵器などが出土し、これらの調査成果は当地方の歴史の復元にとって貴重な資料となりました。

本報告書は発掘調査の記録としては不十分であり、満足いくものではありませんが、多くの方々に活用され郷土の歴史解明の一助となれば幸いに存じます。

最後に、調査に際してご理解とご協力いただきました小鴨解体作業有限会社ならびに地元の方々を始め、関係各機関および各位に対し、心から謝意を表する次第であります。

平成9年3月

倉吉市教育委員会

教育長 足羽一昭

例　　言

1. 本報告書は、平成7年度に倉吉市教育委員会が、産業廃棄物処分場造成事業に伴う事前調査として、倉吉市国府字両長谷において実施した発掘調査の記録である。

2. 発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長 小川 幸人（倉吉市教育委員会教育長 平成7年9月まで）

足羽 一昭（倉吉市教育委員会教育長 平成7年10月より）

調査委員 名越 勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

手嶋 義之（倉吉市文化財保護審議会委員）

調査員 根鈴 輝雄（倉吉博物館学芸員）　　眞田 康幸（文化課課長補佐兼文化財係係長）

森下 哲哉（文化財係主任）　　根鈴智津子（文化財係主事）

竹宮亜也子（文化財係主事 7年度）　　加藤 誠司（文化財係主事）

岡本 智則（文化財係主事）　　岡平 拓也（文化財係主事 8年度）

調査補助員 山根 雅美・井上 達也・中村 圭吾

事務局 福井 輝雄（教育次長 7年度）　　石田佐喜子（教育次長 8年度）

生田 淳美（文化課課長）　　明里 英和（文化財係主任 7年度）

高山 りさ（文化財係主事 7年度）　　山崎慎之介（文化財係主事 8年度）

福澤 昌子（文化財係主事 8年度）　　山下 博子（臨時職員）

内務整理 泉 美智子・松田 恵子・世浪由美子・妻藤 君江・松嶋あつ子・青戸 千秋・竹歳 晓子

谷崎 恵子・大前 俊文

3. 現場での調査は岡本が担当し、山根・井上・中村が補佐した。遺構の図面整理は岡本・山根・井上・中村・松田が担当した。遺物実測は岡本・根鈴智・岡平・山根が担当した。遺物写真は岡本・森下・加藤が担当し、松嶋が補佐した。浄書は泉・世浪・妻藤・青戸が担当した。

4. 第V章は、炭化材の鑑定の分析結果についてパリノ・サーヴェイ株式会社に御寄稿いただいたものである。記して謝意を表します。

5. 本書の執筆は調査員が討議し、第III章住居出土遺物については岡平が、他はすべて岡本が担当した。編集は松田が担当した。

6. 遺構測量のための基準杭測量を椿測量設計株式会社に委託した。

7. 予備調査において検出した資料も本報告書に掲載した。

8. 第1図（地形図）は、建設省国土地理院発行の1：50,000地形図「倉吉」「大山」の一部を複製・加筆したものである。第2図は、平成元年修正測量の1：2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。

9. 掘団中の方位は、特に注記を行わない限り国土座標第V座標系の北を示す。

10. 遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

11. 調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	4
1.	遺構	4
2.	遺物	43
IV	まとめ	54
V	鑑定	57
報告書抄録		

挿図目次

第1図	倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	3	第20図	3号住居平面図	26
第2図	両長谷遺跡調査区位置図	5	第21図	4号住居平面図	27
第3図	両長谷遺跡遺構全体図	7	第22図	5号住居平面図	29
第4図	1号墳平面図	9	第23図	6・7号住居平面図	31
第5図	2号墳主体部平面図	10	第24図	8号住居平面図	32
第6図	3号墳平面図	10	第25図	9・11号住居平面図	33
第7図	3号墳主体部平面図	11	第26図	10号住居平面図	36
第8図	4号墳平面図	12	第27図	12号住居平面図	37
第9図	5号墳平面図	13	第28図	1号掘立柱建物平面図	37
第10図	5号墳主体部平面図	14	第29図	1号貯蔵穴、1~3・5~7号落し穴 遺構図	41
第11図	6号墳主体部平面図	15	第30図	1・2号溝状遺構平面図	42
第12図	7号墳平面図	15	第31図	3~5・8号墳、2・4号土壙墓	
第13図	8号墳遺構図	16	第32図	出土遺物図	45
第14図	8号墳主体部遺構図	19	第33図	1号土壙墓、1・4・5号住居 平面図	
第15図	1号石蓋土壙墓・1~4号土壙墓 平面図	21	第34図	1・4・5・8・9号住居、 2号溝状遺構出土石器遺物図	49
第16図	1・3~6号土壙遺構図	23	第35図	7・9・10号住居出土遺物図	48
第17図	2号土壙・4号落し穴遺構図	24			
第18図	1号住居平面図	25			
第19図	2号住居平面図	26			

I 発掘調査に至る経過

平成7年度、小鴨解体作業有限会社より倉吉市国府字両長谷における産業廃棄物処分場の拡張計画が提示された。開発予定地の踏査を実施したところ、丘陵尾根上及び斜面にかけて遺物の散布を確認した。1982年の踏査において、調査区と同一丘陵北端で古墳を1基確認しており、また1994年の踏査でも調査区を含めた同一丘陵南側で遺物散布を確認している。踏査の結果、遺物の散布状況が散逸なことから、遺跡の存在を確認するため予備調査を行うこととなった。予備調査は、倉吉市教育委員会が1995（平成7）年4月17日～5月9日まで行った。この結果、丘陵尾根部分から斜面部分にかけて竪穴式住居、古墳の周溝が検出され、弥生土器、須恵器などの遺物が出土したため遺跡の存在が明らかになった。倉吉市教育委員会は、小鴨解体作業有限会社と協議を行った結果、やむを得ず掘削される尾根部分から斜面部分にかけての9,000m²を原因者負担により発掘調査を実施することとなった。調査は、倉吉市教育委員会が主体となり、1995（平成7）年10月2日～翌平成8年3月29日まで実施した。

II 位置と歴史的環境

両長谷遺跡は、倉吉市街地から西方へ約5km離れた倉吉市国府字両長谷に所在する。遺跡は、四王寺山山塊と久米ヶ原丘陵の先端との境を南北に伸びる谷の最深部に位置する。調査地は、この谷の西側を南西から北東方向へ伸びる標高45m前後の丘陵尾根を含んだ谷に面した南東斜面である。調査地と水田面との比高差は約23mである。調査前は、南西側は果樹園、北東側は畑地を放棄した後の荒れた状態の雑木林であった。当遺跡の北側、姫ヶ家山（標高171.1m）南麓には約200基からなる上神古墳群（38）が存在する。そして、この谷の両側の丘陵上には古墳が点在し、調査地より約0.7km北方に取木遺跡（51）・一反半田遺跡（52）が所在する。両遺跡は、1984（昭和59）年の調査により追葬のできない小型の横穴式石室を主体とする7世紀代の方墳群で、合わせて7基を検出しており、本遺跡の石室構造と非常に酷似している。当遺跡は、これら古墳群の最南端に位置している。

両長谷遺跡の所在する倉吉市西郊には数多くの遺跡が存在する。以下、分布図（第1図）範囲内の遺跡を中心に概要を述べる。

旧石器時代の遺物は、中尾遺跡（71）から出土した国府型ナイフ形石器（黒曜石製・安山岩質各1）、長谷遺跡から出土したナイフ形石器（安山岩質）などがある。

縄文時代の遺跡は、早期の竪穴式住居と礎群、押型文土器が出土した取木遺跡、84基の落し穴と前～晚期の土器が出土した中尾遺跡、57基の落し穴と尖頭器や早期の押型文土器、後期・晚期の深鉢が出土した長谷遺跡がある。その他、縄文時代中期～後期の土器が出土した中峯遺跡（85）がある。落し穴は、頭根後谷遺跡（23）・大仙峯遺跡（24）・大山遺跡（25）・イキス遺跡（50）からも検出している。

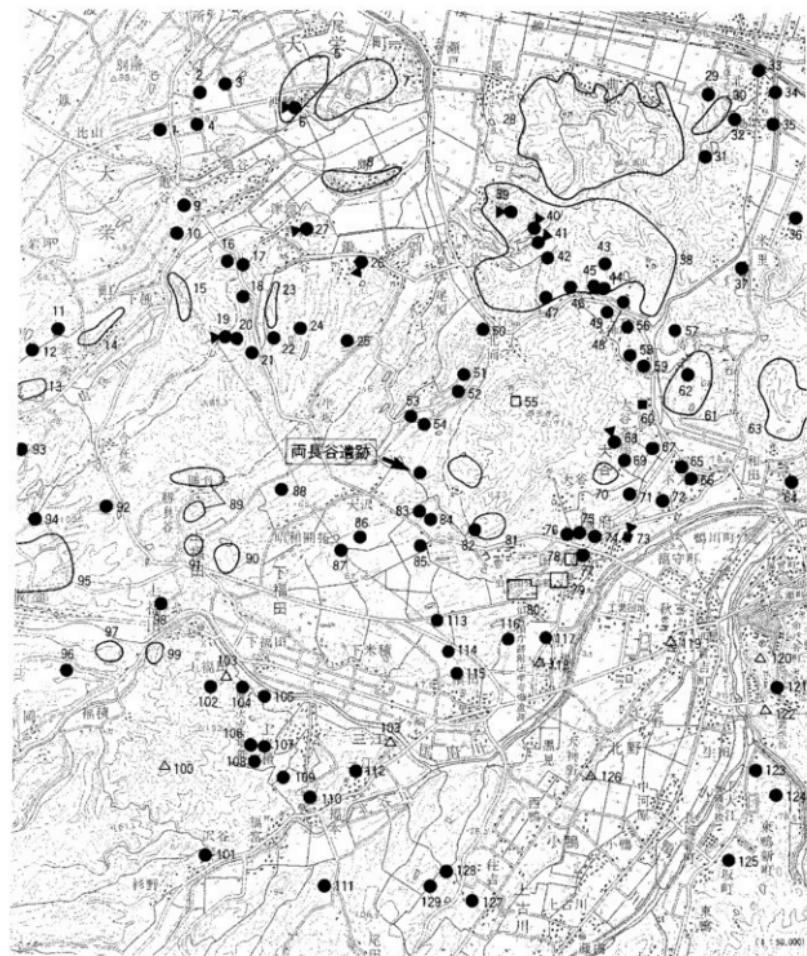
弥生時代の遺跡としては、前期ではイキス遺跡がある。中期には福田寺遺跡（113）、中期から古墳時代にかけての後中尾遺跡（108）、後期から古墳時代にかけての大仙峯遺跡・大山遺跡・コザンコウ遺跡（53）・道祖神峰遺跡（54）・遠藤谷峯遺跡（83）・白市遺跡（84）・中峯遺跡・大沢前遺跡（86）・夏谷遺跡（63）などの集落址がある。中でも中峯遺跡では、鳥形スタンプ文土器が出土している。これらほとんどの遺跡は古墳時代にも営まれている。この時代の墳墓としては、丘陵上に3基の四隅突出型墳丘墓が確認された阿弥大寺墳丘墓群（104）、四隅突出型墳丘墓の可能性がある柴栗古墳群（59）の弥生墳墓、大谷後口谷墳丘墓群（82）・三度舞墳丘墓（60）がある。これらはいずれも、弥生時代後期の墳丘墓である。

倉吉市西郊に存在する前期古墳は、国府川中流域左岸の微高地上には、船載鏡3面及び種々の鉄器類が出土した国分寺古墳（73・前方後方墳・全長60m）をはじめ、四王寺山から派生した丘陵上に立地する大谷大将塚古墳（68・前方後円墳・全長50m）、鍛形石・琴柱形石製品などの出土で知られている上神大将塚古墳（58・円墳・直径30m）がある。国府川の支流である北谷川の右岸の天神野丘陵上には、塚ノ山古墳（前方後円〈方〉墳・全長50m）がある。

後期古墳は、小鳴川右岸に所在する東伯耆で最も早く横穴式石室を導入した大宮古墳（円墳・直径28m）・家ノ後口1号墳（円墳・直径15m）、閉塞石が良好な状態で遺存していた山際1号墳（円墳・直径10m）・2号墳（円墳・直径10m）（124）がある。また、天神川下流域右岸の福庭古墳（円〈方〉墳・直径35m）は整美な切石を用いている。向山にある向山6号墳（前方後円墳・全長40m）は仕切石によって玄室内に三屍床を設けている。切石を用いた石室に石屋形を設ける三明寺古墳（円〈方〉墳・直径18m）など古墳時代後期には横穴式石室が盛んに造られている。その他、東鳥ヶ尾古墳（22・円墳・直径15m）・高鼻2号墳（26・前方後円墳・全長26m）・頭根後谷遺跡・大山遺跡・郊家平古墳群（21）・服部古墳群（95）・クズマ古墳群（46）・取木遺跡・一反平田遺跡などがある。帆立貝式古墳が5基も群集して検出された沢べり遺跡2次（66）では、周溝内から鹿皮を纏った人物埴輪が出土している。古墳時代の集落としては、後谷口遺跡（109）・西山遺跡（44）・郷家遺跡（74）・宮ノ下遺跡（77）・移動式の窓が出土した夏谷遺跡がある。また、不入岡遺跡（72）では住居内より作り付けの窓が検出され、非在地系の土器が多数出土した。古墳・集落以外のこの時代の遺跡としては、上野遺跡（112）・谷畑遺跡（45）がある。上野遺跡からは25個にのぼる子持須恵器が、土壤内より一括して検出された。谷畑遺跡では、人形・動物形土製品などの祭祀遺物が多数検出されている。

奈良時代に入ると久米ヶ原丘陵の東端部周辺に伯耆国庁（80）・伯耆国分寺（79）・伯耆国分尼寺（78）、大型建物群を検出し官衙跡と推定されている不入岡遺跡が近接して設けられ、伯耆国の政治・文化の中心地となる。平安時代には、四王寺山山頂に四王寺（55）が建立された。

1 向野遺跡	18 清水谷古墳群	35 島遺跡	52 一反平田遺跡	69 小林古墳群
2 干目野遺跡	19 二タ子冢6号墳	36 船渡遺跡	53 コザンコウ遺跡	70 大谷古墳群
3 西干子遺跡	20 二タ子冢遺跡	37 米里綱擣出土塗	54 遺租特峰遺跡	71 中尾遺跡
4 後ろ谷遺跡	21 郊家平古墳群	38 上神古墳群	55 四王寺跡	72 不入岡遺跡
5 西徳波古墳群	22 東鳥ヶ尾古墳	39 上神45号墳	56 上神童山遺跡	73 国分寺古墳
6 西徳波16号墳	23 頭根後谷遺跡	40 上神44号墳	57 西南遺跡	74 郷坂遺跡
7 瀬戸古墳群	24 大仙塚遺跡	41 上神48号墳	58 上神大将塚古墳	75 打坂遺跡
8 島遺跡群	25 大山遺跡	42 上神51号墳	59 柴栗古墳群	76 古神宮古墓
9 亀谷古墳群	26 高鼻2号墳	43 桜木遺跡	60 三度舞墳丘墓	77 宮ノ下遺跡
10 亀谷第1遺跡	27 大塚山古墳	44 西山遺跡	61 丽喜山古墳群	78 伯耆国分尼寺跡
11 上種第1遺跡	28 曲古墳群	45 谷畑遺跡	62 丽喜山9号墳	79 伯耆国分寺跡
12 上種第5遺跡	29 八幡神社経塚	46 クズマ遺跡	63 夏谷遺跡	80 伯耆国庁跡
13 上種中央古墳群	30 北尾古墳群	47 上神119号墳	64 平ル林遺跡	81 古墳群
14 下種古墳群	31 島古墳群	48 トドロケ遺跡	65 沢べり遺跡（1次）	82 大谷後口谷塚古墳群
15 下種東古墳群	32 天王山遺跡	49 東狭間古墳	66 沢べり遺跡（2次）	83 速藤谷峯遺跡
16 西焼ス古墳群	33 堤屋敷遺跡	50 イキス遺跡	67 イザ原古墳群	84 白市遺跡
17 清水谷尻1号墳	34 北尾遺跡	51 取木遺跡	68 大谷大将塚古墳	85 中峯遺跡



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

86 大沢前遺跡	95 犬部遺跡群	104 阿弥大寺墳丘墓群	113 福寺遺跡	122 赤岩山古墳
87 大道谷遺跡	96 牛王野遺跡	105 下小垣遺跡	114 岩屋遺跡	123 大畠遺跡
88 昭和開拓遺跡	97 竜坂古墳群	106 奥田遺跡	115 矢戸遺跡	124 山際古墳群
89 勝負谷遺跡群	98 鍾音堂遺跡	107 算ヶ平遺跡	116 烏掛遺跡	125 東鶴遺跡
90 離鬼ヶ岳古墳群	99 上福田横穴群	108 後中尾遺跡	117 今倉遺跡	126 市場城跡
91 ケンカ塚古墳群	100 高城城跡	109 後口谷遺跡	118 今倉城跡	127 野畑古墳群
92 鶏塚古墳群	101 屋敷遺跡	110 福本家ノ上古墓	119 北ノ城跡	128 後口野1号墳
93 東華遺跡	102 小谷遺跡	111 蒜津峰跡	120 四十二九城跡	129 八ツ塚古墳群
94 築塚遺跡	103 磐跡	112 上野遺跡	121 萩才寺1号墳	

III 調査の概要

調査は、重機により表土を除去した。表土除去後入力による検出を行い、遺構の掘り下げを行った。

調査地の基本層序は、黒色土（表土・旧耕作土）、暗褐色土（ソフトローム土）、黄褐色砂質土（ホーキ火山砂層）、黄褐色砂質土（A T：姶良・丹沢火山灰層）、橙褐色粘質土（疊混じり粘質層）、黄褐色土（D K P：大山・倉吉軽石層）の順である。遺構の検出は、暗褐色土（ソフトローム土）上層で行ったが、調査区南西側（果樹園部分）では、耕作機械による掘削が著しく黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）で検出した。調査開始後、調査区南西側斜面については遺構がないことを確認したうえで調査面積の縮小を行った。調査後の面積は $7,671\text{m}^2$ である。遺構の測量は国土座標による4 mメッシュを組み、古墳の主体部と遺物出土状況図については $S = 1/10$ で、その他の遺構は $S = 1/20$ で実測した。調査地の調査後地形測量は平板を使用し、 $S = 1/100$ 、25cm毎の等高線で測量した。

調査の結果、古墳8基、堅穴式住居12棟、掘立柱建物1棟、石蓋土壙墓1基、土壙墓4基、土壙6基、落し穴7基、貯蔵穴6基、溝状遺構2条を検出した。

1. 遺構

古墳群

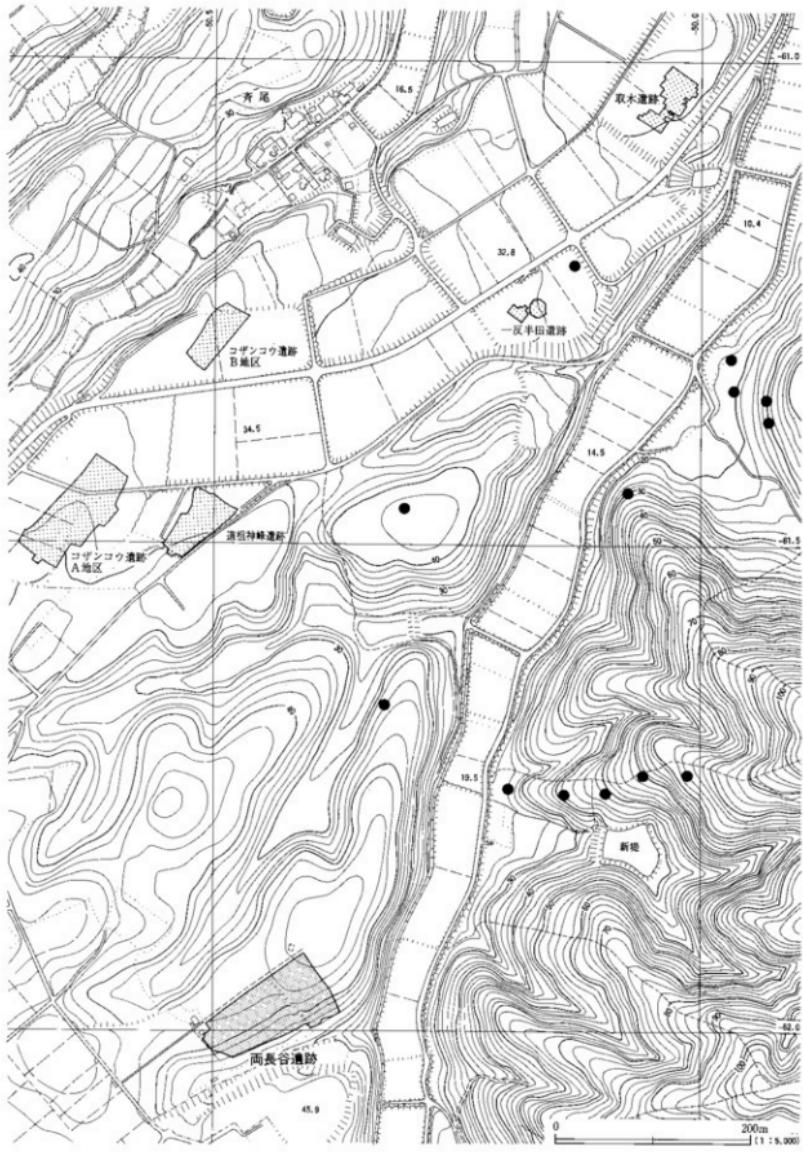
調査区の丘陵稜線上よりやや南東に下った斜面上で8基の古墳を検出した。8基の古墳は畑地造成のため削平を受けており、いずれも封土を全く失い、地山である黄褐色土（ソフトローム上面）において周溝および主体部掘り方を検出したものである。周溝を確認できたのは、1・3・4・5・7・8号墳である。溝は浅い。

主体部は、8号墳を除きいずれも石材が抜き取られており、基底部に石室石材がわずかに残っていたという状態であり、主体部掘り方（墓壙）よりその規模を推定した。

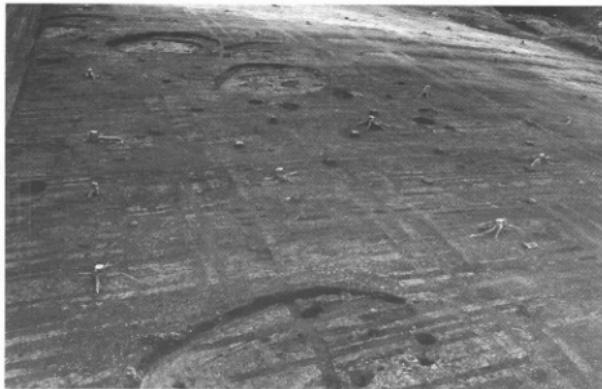
遺物は、5・8号墳は玄室内、3・8号墳は篠道・前庭部から出土したが、ほとんどは検出面・擾乱土中からの出土であった。以下、古墳ごとに述べる。



調査前全景（南東より）



第2図 両長谷遺跡調査区位置図



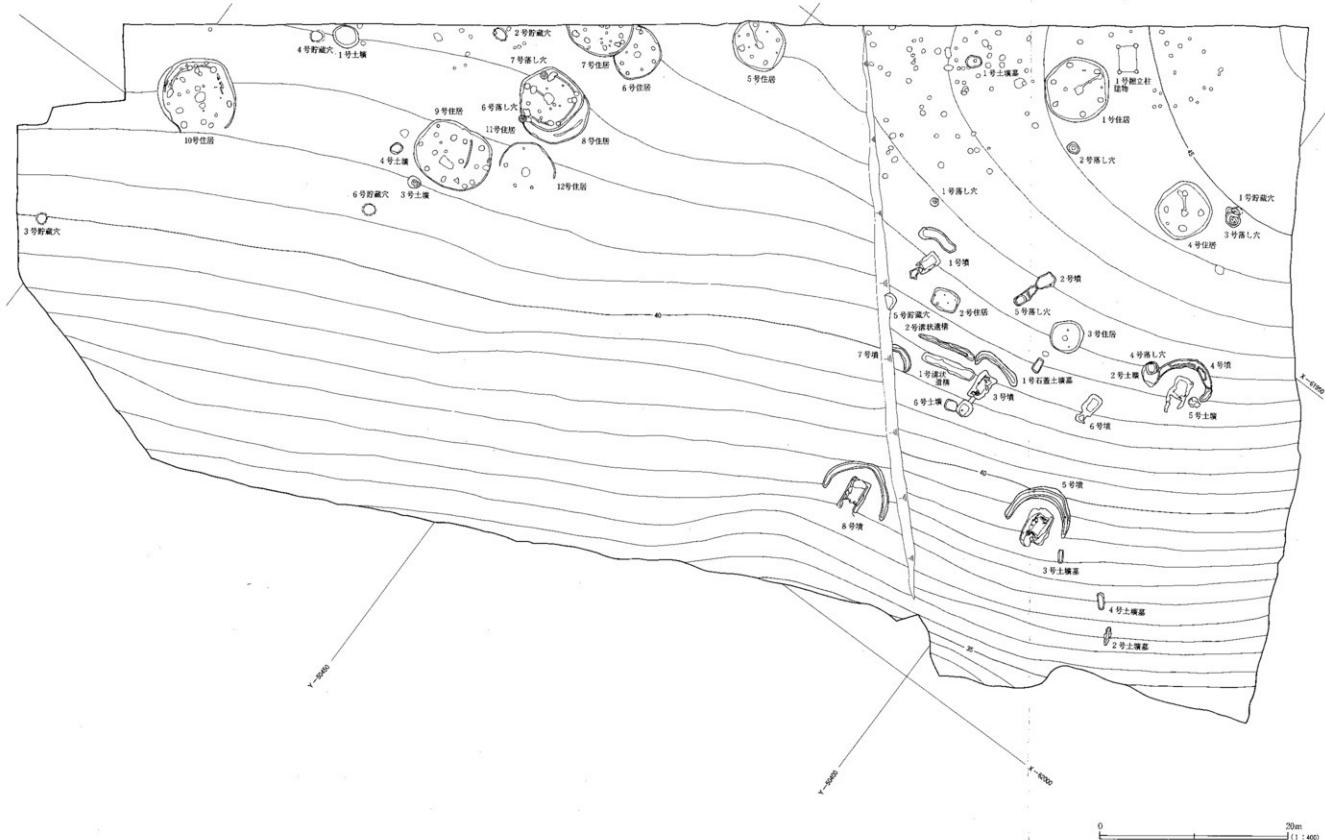
調査後全景（北西より）



（北東より）



（北東より）



第3図 岡長谷遺跡遺構全体図

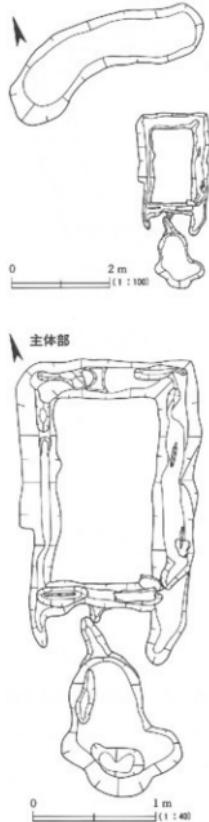


1号墳（南より）

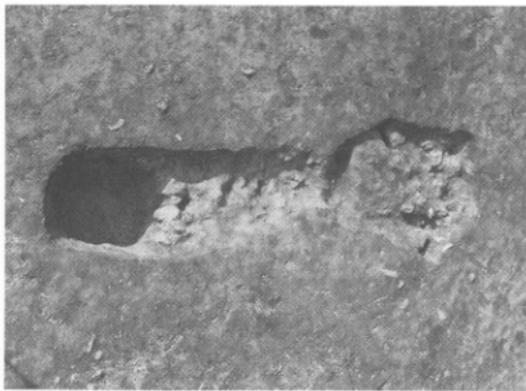
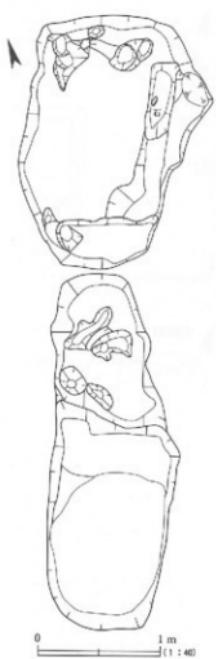
1号墳 丘陵頂部からやや下った標高約43m付近に位置する。墳丘は削平のため遺存せず、遺構検出面に石材が散乱していた。周溝は斜面の高い側で一部検出し、北西隅がやや角張る。遺存する長さ3.4m・幅0.8~1.0m、深さ0.1mを測る。周溝の断面は浅くゆるやかなU字状を呈する。墳形及び墳丘規模は不明。主体部は南に開口する横穴式石室である。主軸は18度東偏する。石室掘り方の基底部には、薄い板石を用材とした石室石材がわずかに遺存するだけで、掘り方によりその規模を推測するに過ぎない。石室掘り方の全長は2.5mを測り、長方形の玄室と羨道からなる。玄室規模は、内法で長さ1.53m・幅0.79mを測る。羨道は、内法で長さ1.08m・幅0.7mを測る。玄室と羨道の境界には玄門石掘り方がある。出土遺物はなかった。

2号墳 1号墳の東側約8m離れた標高約43m付近に位置する。墳丘及び周溝は削平され遺存せず、主体部掘り方のみを検出した。墳形及び墳丘規模は不明。主体部は南に開口する横穴式石室である。主軸は19度東偏する。石室掘り方の全長は2.1mを測る。玄室規模は、内法で長さ1.35m・幅0.69mを測る。羨道は長さ1.08m・幅0.7mを測る。羨道の南端は5号落し穴と切り合う。出土遺物はなかった。

3号墳 2号墳の南側約6m離れた標高約43m付近に位置する。墳丘は削平されて遺存しない。遺構検出面に石材が散在していた。周溝は斜面の高い側で検出し、北西隅が角張る。遺存する東西長4.1m・南北長1.45m・幅0.50~0.75m・深さ0.15mを測る。周溝の断面は浅いV字状を呈する。周溝より墳形を復元すると、周溝を含めた一辺が約4.2mの方墳であると推定される。主体部は南に開口する横穴式石室である。主軸は4度東偏する。石室掘り方の全長は2.5mを測る。石室掘り方の基底部には、薄い板石を用材とした石室石材が散在しており、原位置を留めているものは西側側壁の基底石だけであった。玄室規模は、内法で長さ1.7m・幅0.9mを測り長方形を呈する。羨道は長さ0.55m・幅0.8mを測る。玄室と羨道の境界には玄門石掘り方がある。主体部攢乱土より須恵器坏身（4）が出た。さらに、羨道より南側に長さ0.55m・幅0.40m・深さ0.14mの小溝を挟んで、長さ1.75m・幅1.55m・深さ0.36mの前庭部を検出した。この前庭部上面より、須恵器坏蓋（1・2）、坏身（3）が出土した。

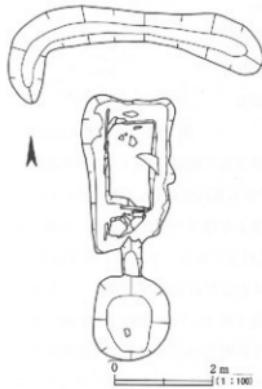


第4図 1号墳平面図



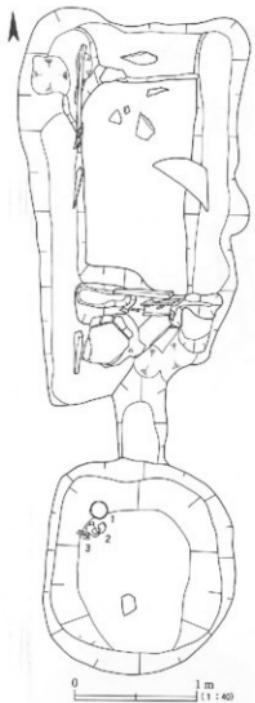
2号墳主体部・5号落し穴(東より)

第5図 2号墳主体部平面図



第6図 3号墳平面図

3号墳(南より)

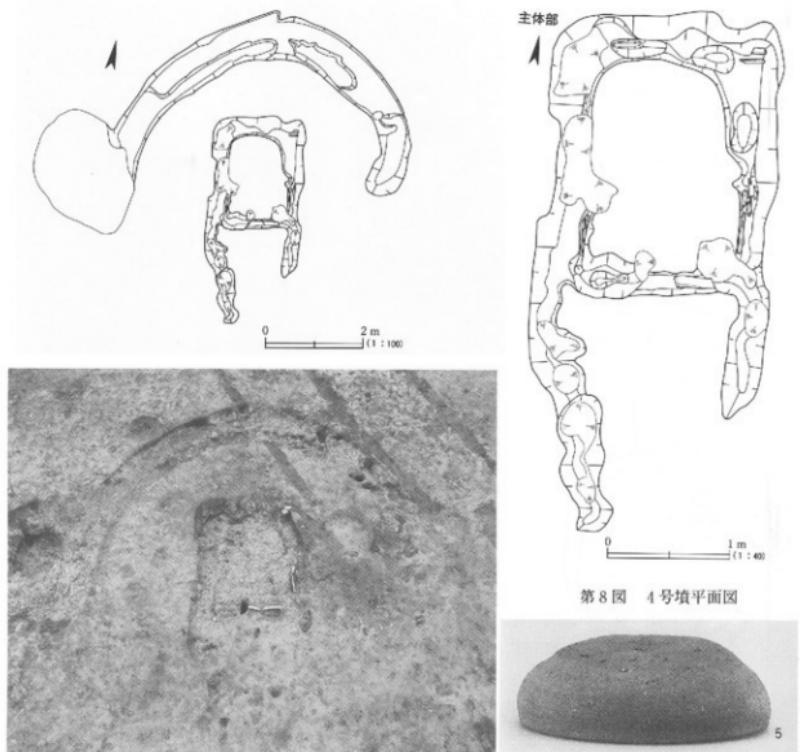


第7図 3号墳主体部平面図



3号墳前庭部遺物出土状況（南より）



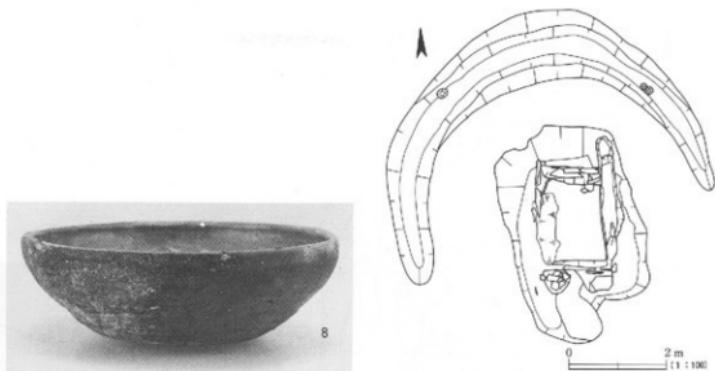


第8図 4号墳平面図

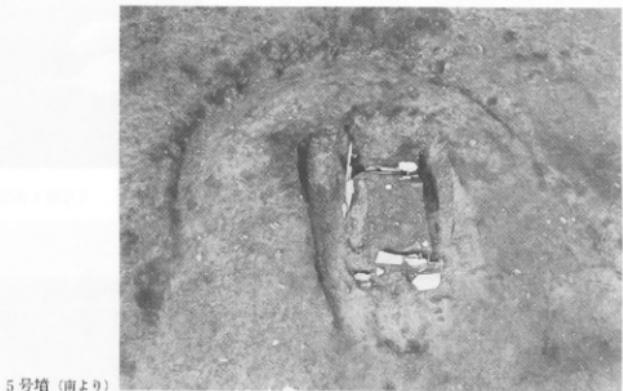
4号墳(南より)

4号墳 2号墳の東側約12m離れた標高約43m付近に位置する。墳丘は削平されて遺存しない。遺構検出面に石材が散乱していた。周溝は主体部主軸延長線上で角をなし、斜面の高い側だけを半周し、端部はやや内寄りになる。規模は、幅0.5~0.8m・深さ0.1~0.2mを測り、墳丘よりのほうが一段深くなる。墳丘規模は東西約3.9m、周溝を含めると約4.9mを測る。主体部は南に開口する横穴式石室である。主軸は11度西偏する。石室掘り方の基底部には、薄い板石を用材とした石室石材片がわずかに遺存していた。石室掘り方の全長は3.38mを測る。玄室規模は、内法で長さ1.75m・幅1.10mを測り長方形を呈する。羨道は、長さ1.95m・幅1.15mを測り、玄室と羨道の境界に玄門石掘り方がある。主体部擾乱より須恵器壺蓋(5)が出土した。周溝の西端は2号土塙、4号落し穴と切り合う。

5号墳 3号墳の南東約11m離れた標高約39m付近に位置する。墳丘は削平されて遺存しない。周溝は斜面の高い側を多角形気味に半周する。周溝規模は、幅0.55~1.15m・深さ0.1~0.5mを測り、断面はV字状を呈する。墳丘規模は東西長約3.9m、周溝を含めると約5mを測る。主体部は南に開口する横穴式石室である。主軸は3度西偏する。石室掘り方は擾乱が著しく、石材はほとんどが抜き取られ、奥壁、西側側壁の一部がわずかにがら



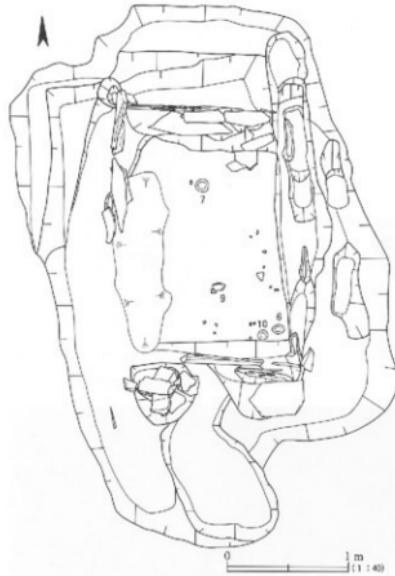
第9図 5号墳平面図



5号墳(南より)



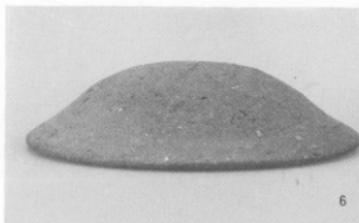
5号墳(南より)



第10図 5号墳主体部平面図



5号墳主体部土器出土状況（南東より）



6



7



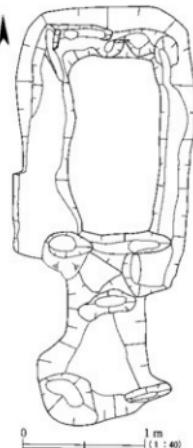
10



9

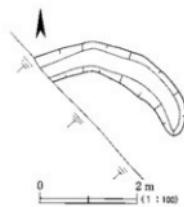
遺存している状態であった。また、西玄門右側に閉塞石の一部が遺存していた。石室掘り方の全長は3.54mを測る。玄室規模は、内法で長さ1.55m・幅1.20mを測り長方形を呈する。羨道は、長さ0.85m・幅0.55mを測る。副葬品は、玄室内床面奥壁よりのほぼ中央で須恵器坏身(7)、玄門よりのほぼ中央で坏身(9)、東側玄門脇で坏蓋・坏身(6・10)が出土した。

6号墳 4号墳の南西側約5m離れた標高約42mに位置する。墳丘及び周溝は削平されて遺存せず、主体部掘り方を検出した。墳形及び墳丘規模は不明。主体部は南に開口する横穴式石室である。主軸は4度東偏する。石室掘り方の基底部には、薄い板石がわずかに遺存していた。石室掘り方の全長は3.4mを測る。玄室規模は、内法で長さ1.45m・幅0.75mを測り長方形を呈する。羨道は、長さ1.35m・幅0.65mを測る。出土遺物はなかった。



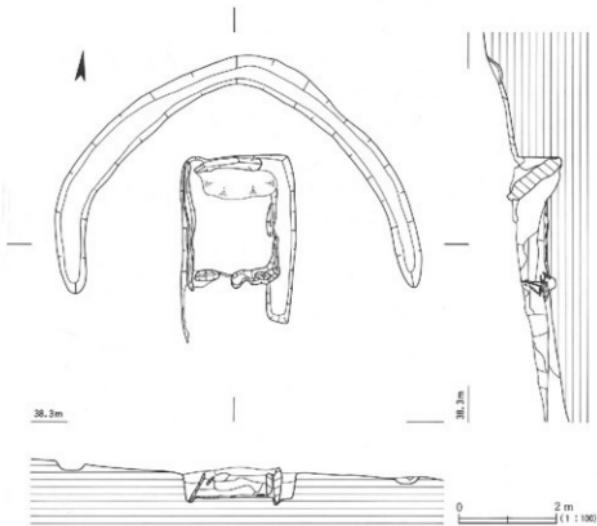
第11図 6号墳主体部平面図

7号墳 3号墳の西側約6m離れた標高約41.5m付近に位置する。西側は、果樹園造成のため深さ約2m掘削されており、周溝の一部のみを検出した。墳形及び墳丘規模は不明。周溝は幅0.6m・深さ0.15mを測り、斜面の高い側をやや角張りながら巡る。出土遺物はなかった。



第12図 7号墳平面図

8号墳 3号墳の南側約15m離れた標高約37~38m付近に位置する。墳丘は削平され遺存しない。周溝は、主体部の主軸延長線上で角をなし、斜面の高い側だけを半周し、端部はやや内寄りになる。周溝規模は、幅0.4m~0.6m・深さ0.10~0.15mを測り、断面での形状はゆるやかなU字状を呈する。周溝より復元すると墳丘規模は、東西長約5.1m、周溝を含めると6.1mを測る。主体部は、主軸が北から9度西偏しほば南に開口する横穴式石室である。石室の全長は3.8mで長方形の玄室と正方形の羨道からなる。玄室の規模は、内法で長さ2.1m・中央の幅1.4mを測る。羨道は長さ1.08m・幅1.54mを測る。石室を構成している石は、現状では基底石だけが残り、奥壁1枚・西側側壁3枚・東側側壁2枚・羨道西側側壁2枚・羨道東側側壁2枚・玄門石2枚である。天井石は耕作機械に破壊されており、石室内には大量の板石が落ち込んでいた。奥壁は上半分が消失し基底部が玄室寄りに傾いた状態であった。遺存する奥壁は、厚さ30cm・最大幅146cmを測る。側壁のうち西側奥壁寄りのものは高さ70cm・幅120cm・厚さ4cm、玄室中央のものは高さ44cm・幅110cm・厚さ4cm、羨道寄りのものは高さ66cm・幅98cm・厚さ4cmを測る。東側奥壁寄りのものは高さ88cm・幅172cm・厚さ16cm、羨道寄りのもので高さ86cm・幅146cm・厚さ16cmを測る。奥壁は、ほぼ垂直に立てていたと推定される。奥壁寄りのものは奥壁を挟み込む形で内面をほぼ垂直にして立てかけている。羨道寄りの側壁は、西側は奥壁寄りの側壁と内側の線を合わせて立てていたと考えられるが、東側は奥壁寄りの側壁の床面における線から約3cm外側に立てている。羨道側壁のうち西



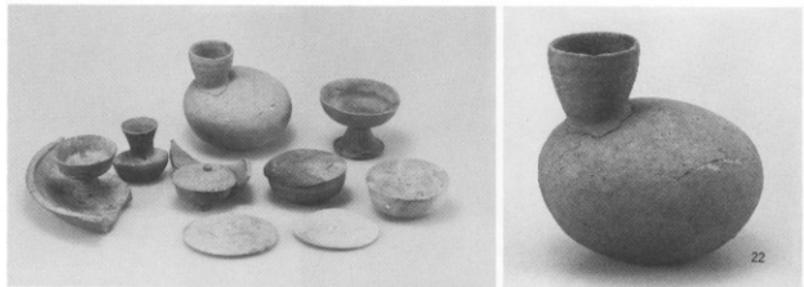
第13図 8号墳遺構図



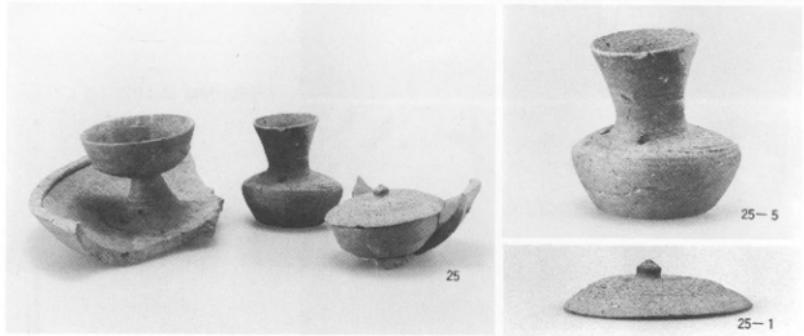
8号墳(南より)

側玄室寄りのものから高さ42cm・幅80cm・厚さ4cm、高さ52cm・幅104cm・厚さ4cm、東玄室寄りのものから高さ36cm・幅102cm・厚さ4cm、高さ46cm・幅48cm・厚さ4cmを測る。玄室床面には、厚さ3~4cm、一辺が30~55cmの板石が9枚、敷石として現存していた。玄門石間には、幅20×50cm大・厚さ3cmの板石を4~5枚水平に積み上げ、さらにその上には同規模の板石を垂直に何枚も重ね合わせて閉塞していた。

遺物は、玄室床面より坏蓋2(12・13)・坏身2(14・15)、狭道上面より坏蓋3(17~19)・坏身1(20)・高坏(21)・平瓶1(22)・4種の小型土器を配した子持器台(25)が出土した。



22



25

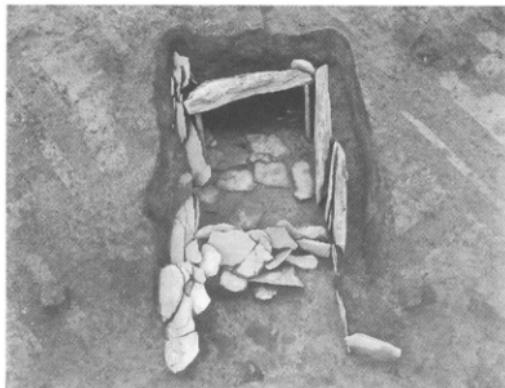
25-5

25-1



25-4

25-2



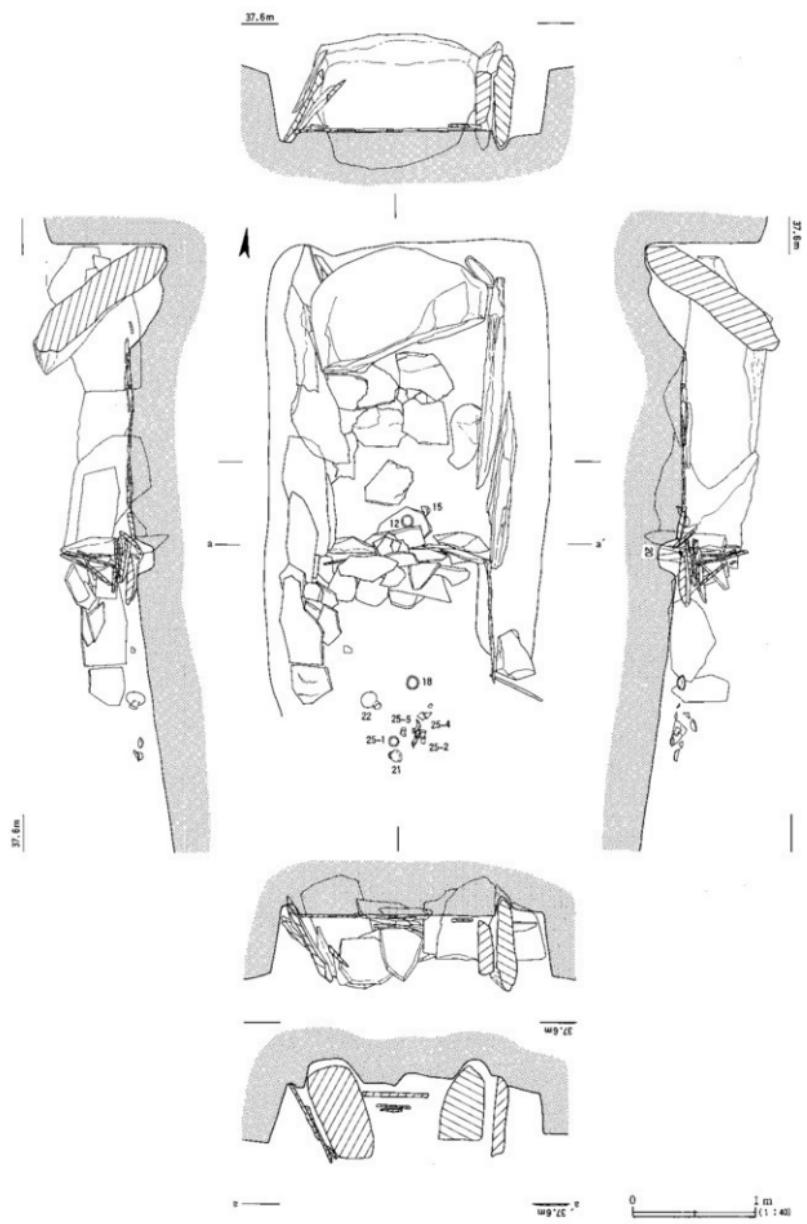
8号墳主体部（南より）



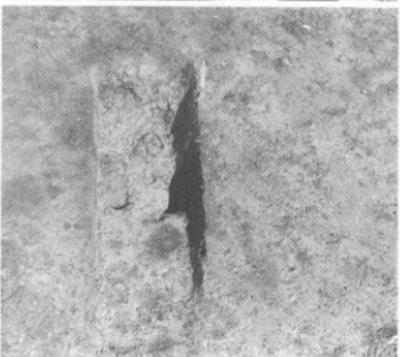
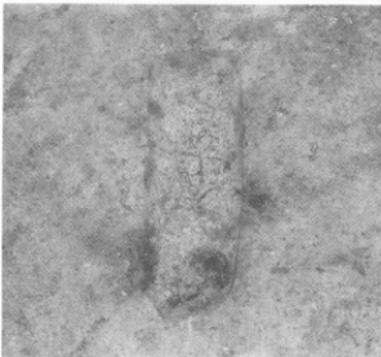
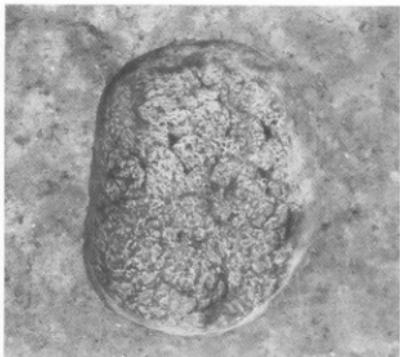
8号墳玄室内遺物出土状況（北より）



8号墳廊道遺物出土状況（東より）



第14図 8号墳主体部造構図



△1号石蓋土壤墓（南より）

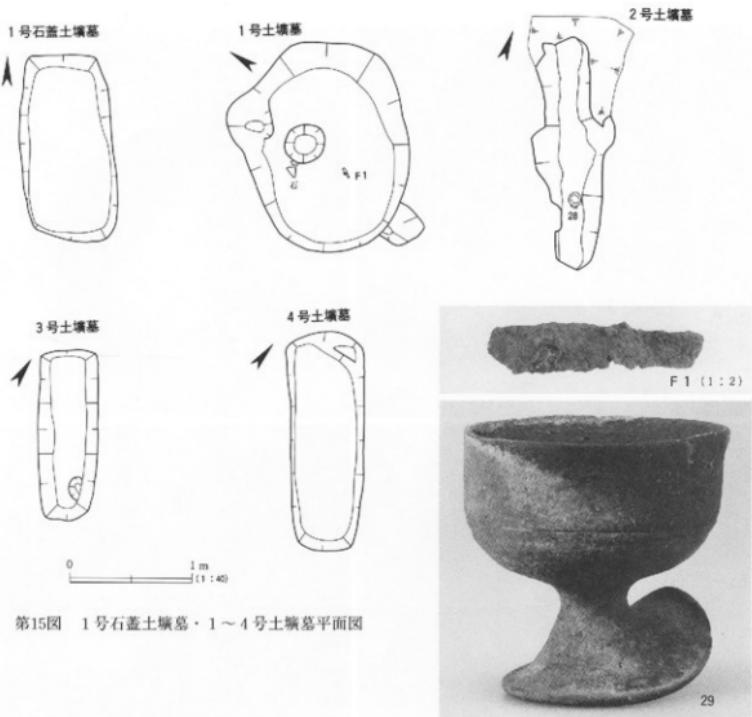
△1号土壤墓（北東より）

△2号土壤墓（南東より）

△2号土壤墓遺物出土状況（南東より）

△3号土壤墓（南東より）

△4号土壤墓（南東より）



第15図 1号石蓋土壤墓・1~4号土壤墓平面図

1号石蓋土壤墓 3号墳の北東約2m離れた標高約42.5m付近に位置する。主軸は北から3度西偏する。墓壙掘り方規模は、長さ1.6m・幅0.8m・深さ0.1mを測る。床面の規模は長さ1.5m・幅0.6mを測る。埋土中には、 20×40 cm大の石蓋片が数片出土した。

1号土壤墓 1号住居の南西約8m離れた標高約44.5m付近に位置する。主軸は北より57度東偏する。墓壙掘り方規模は、長さ1.7m・幅1.3m・深さ0.3mを測る。床面の規模は、長さ1.5m・幅1.1mを測る。墓壙床面の中央よりやや南側で刀子（F1）、埋土中よりミニチュア土器片(27)が出土した。

2号土壤墓 5号墳の南東側約10m離れた標高約36m付近に位置する。主軸は北より42度西偏する。墓壙掘り方規模は、長さ1.4m・幅0.5m・深さ0.2mを測る。床面の規模は、長さ1.9m・幅0.3mを測る。掘り方南側検出面で須恵器环身(28)が出土した。

3号土壤墓 5号墳の南東側周溝より約1m離れた標高38m付近に位置する。主軸は北より32度西偏する。墓壙掘り方規模は、長さ1.4m・幅0.5m・深さ0.2mを測る。床面の規模は、長さ1.3m・幅0.3mを測る。5号墳の周溝内埋葬施設の可能性がある。

4号土壤墓 2号土壤墓の北東側約2m離れた標高約37m付近に位置する。主軸は北より41度西偏する。墓壙掘り方規模は、長さ1.8m・幅0.6m・深さ0.2mを測る。床面の規模は、長さ1.6m・幅0.5mを測る。検出面より須恵器高环(29)が出土した。



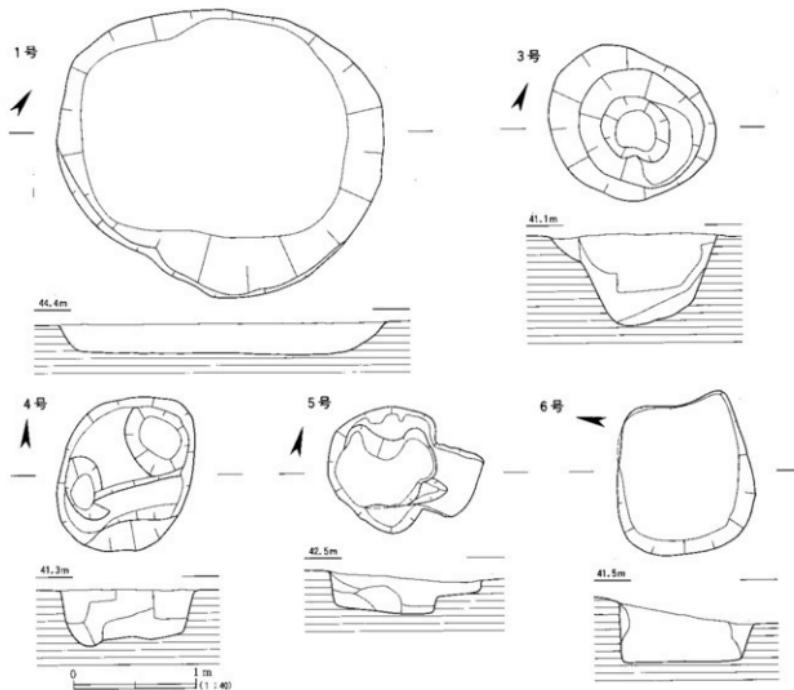
△1号土壤(南より)

△4号土壤(北西より)

△6号土壤(西より)

△3号土壤(西より)

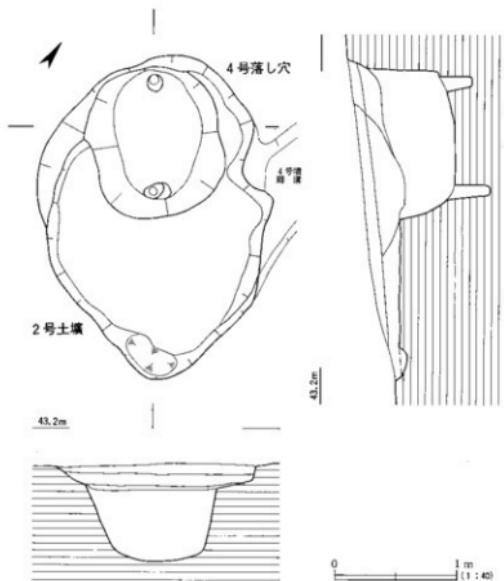
△5号土壤(東より)



第16図 1・3～6号土壤遺構図

土壤

1号土壤は、調査区の南西側に位置する。掘り方規模は、長さ1.4m・幅1.2m・深さ0.2mを測る。2号土壤は、4号墳の周溝西端に、4号落し穴とともに切り合う。掘り方規模は、長さ2.1m・幅2.0m・深さ0.3mを測る。3号土壤は、9号住居の南側約1m離れて位置する。掘り方規模は、長さ1.2m・幅1.3m・深さ0.7mを測る。4号土壤は、3号土壤の北西側約3m離れて位置する。掘り方規模は、長さ1.1m・幅1.1m・深さ0.3mを測る。5号土壤は、4号墳の周溝東端に位置する。掘り方規模は、長さ1.2m・幅0.8m・深さ0.3mを測る。6号土壤は、3号墳前庭部の掘り方西端に位置する。掘り方規模は、長さ1.1m・幅1.1m・深さ0.4mを測る。



第17図 2号土壤・4号落し穴遺構図

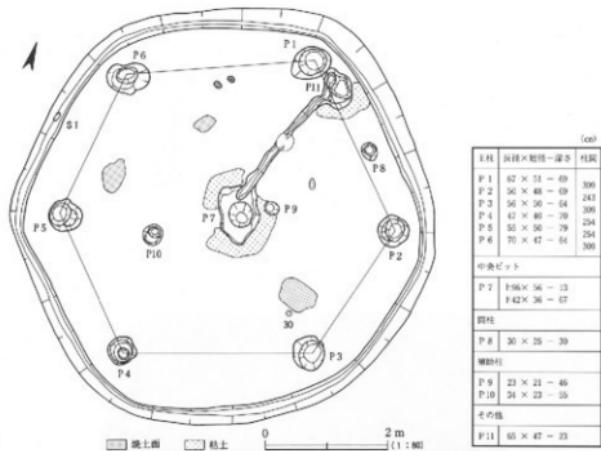
堅穴式住居

調査区の尾根筋、標高43~45m付近の平坦地で12棟の堅穴式住居を検出した。1~4号住居は比較的良好な遺存状況であり、暗褐色土（ソフトローム土）上層で検出したが、5~12号住居は耕作機械の著しい擾乱のため、黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層）で検出を行った。また、5・9号住居より炭化材が出土しており焼失家屋と考えられる。遺物は各住居から出土している。以下、各住居ごとに述べる。

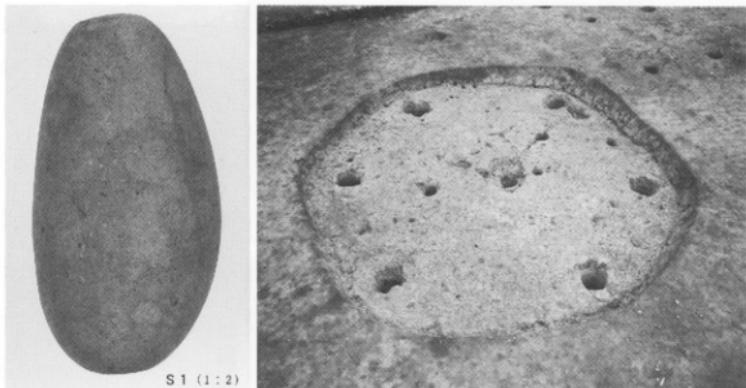
1号住居 調査区北側、丘陵尾根筋標高45m付近に位置する。床面の平面形は六角形を呈し、その中心は中央ピットにある。床面の規模は、南北6.7m・東西6.2m、床面積3.15m²を測り、比較的大型である。壁高は北側で37cm、南側で22cmを測る。床面はほぼ平坦で、幅8~16cm、深さ3~4cmの周壁溝が全周する。主柱は6本で円弧状に並び、その中心もまた中央ピットにある。P11の周辺には橙褐色粘質土の貼床が施されていた。中央ピットは方形の段を有し、その北隅からP11にはば直線的な幅8~16cm・深さ3~6cmの間仕切り溝が延びる。補助柱は3本で、中央より北東側に2本、南西側に1本である。間柱は1本で、P1~2間のはば中央に位置する。焼土面は主柱より内側に4箇所認められた、P1~2間のものは小さく他は大きい。

遺物は多くない。床面から脚台部(30)が、埋土中から壺(31・32)・壺・台部(33)が出土している。床面西側周溝内より敲石(S1)が出土した。脚台部(30)は、壺か壺の底部だと考えられるが、天地を逆に伏せた状態で出土していること、脚台部の裏面の風化が激しいことなどから器台に転用していた可能性がある。

2号住居 1号住居の南側約22m離れた標高43m付近に位置する。床面の平面形は四隅が角張る隅丸長方形を呈する。床面の規模は、南北1.8m・東西2.6m、床面積4.3m²を測り、比較的小型である。壁高は北側で39cm・南側で13cmを測る。床面はほぼ平坦で、周壁溝は幅6~15cm、深さ2~3cmで全周するが、東側・西側の2本の



第18図 1号住居平面図



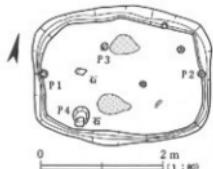
1号住居(南より)

主柱穴のところで途切れている。補助柱は2本で、中央より北西側と南西側の1本ずつである。焼上面は中央付近に3箇所認められた。南東のものは小さく他は大きい。ここでは住居として扱ったが大型の貯蔵穴の可能性もある。

遺物は少なく、埋土中から甕片が出土した。

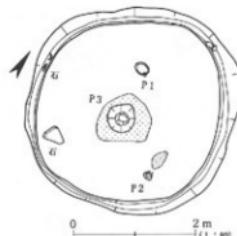
3号住居 2号住居の東側約11m離れた標高約43m付近に位置する。床面の平面形は四隅がやや角張る不整円形を呈し、その中央にはほぼ中央ピットにある。中央ピットは方形の段を有し、掘り方周辺には橙褐色粘質土が敷かれている。床面の規模は、南北3.0m・東西2.9m、床面積7.3m²を測り、比較的小型である。壁高は北側で58cm、南側で50cmを測る。床面はほぼ平坦で、周壁溝は幅8~12cm、深さ2~3cmで全周する。主柱は2本で、中央ピットの北側と南東側にある。焼上面はP.2北脇に1箇所認められた。

遺物は床面北西側で鉈(F.2)が出土した。



第19図 2号住居平面図

(m)		
工具	長径×短径-深さ	面積
P 1	13 × 12 - 59	238
P 2	13 × 11 - 28	135
鍋の柱		
P 3	13 × 11 - 33	
P 4	28 × 26 - 32	

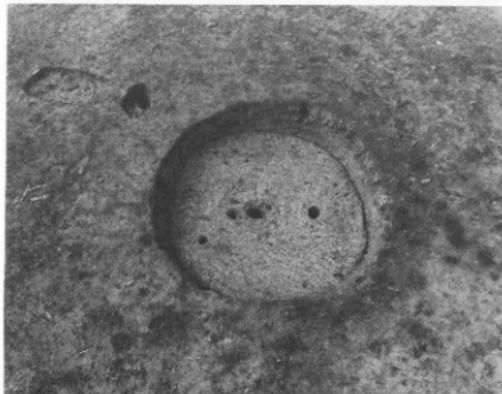


第20図 3号住居平面図

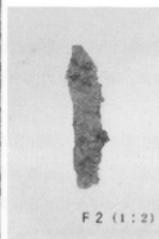
(m)		
工具	長径×短径-深さ	面積
P 1	23 × 18 - 53	165
P 2	13 × 11 - 46	135
中火鉢		
P 3	51 × 47 - 54	



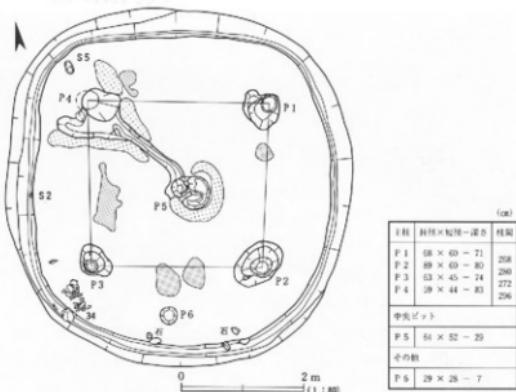
△ 2号住居 (南より)



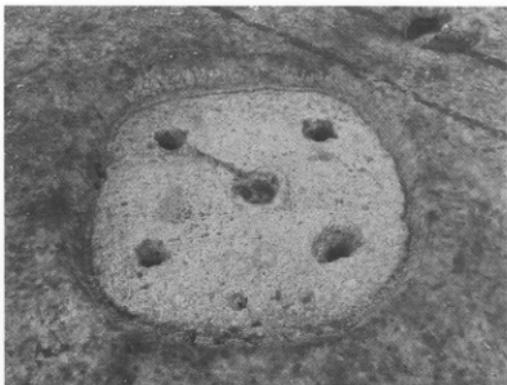
▽ 3号住居 (北東より)



F 2 (1 : 2)



第21図 4号住居平面図



4号住居（南西より）

4号住居 1号住居の東側約11m離れた標高約43m付近に位置する。床面の平面形は四隅がやや角張る隅丸方形を呈し、その中心は中央ピットにある。床面の規模は、南北4.95m・東西4.90m、床面積21.2m²を測り、比較的大型である。壁高は北側で60cm、南側で21cmを測る。床面はほぼ平坦で、居壁溝は幅10~22cm、深さ4~9cmで全周する。主柱は4本で円弧線上に並び、その中心もまた中央ピットにある。中央ピットの北西側からほぼ直線的な幅15~20cm・深さ5~7cmの間仕切り溝が延び、P 4を挟み込む形でV字状になる。中央ピットの掘り方周辺及びP 4を挟む間仕切り溝の外縁には、橙褐色粘質土が敷かれている。間柱は1本で、P 2~3のはば中央の壁よりに位置する。焼土面は、各柱穴間と間仕切り溝内に6箇所認められた。

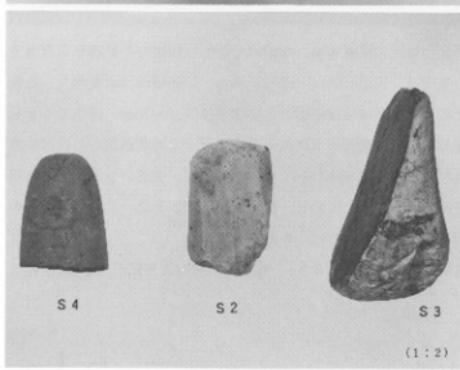
遺物は南西隅床面より壺(34)が出土した。北西隅床面より蔽石(S 5)、西側周壁溝内より砥石(S 2)、埋土中より蔽石(S 4)・砥石(S 3)が出土した。



4号住居土器群出土状況
(東より)



34

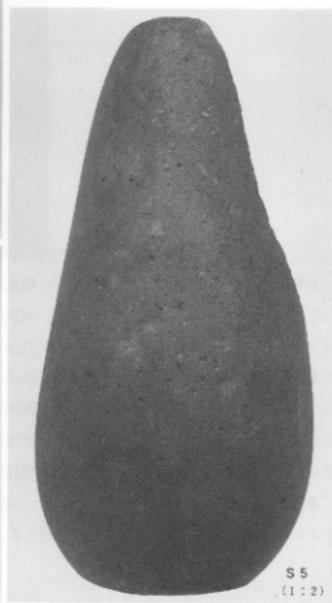


S 4

S 2

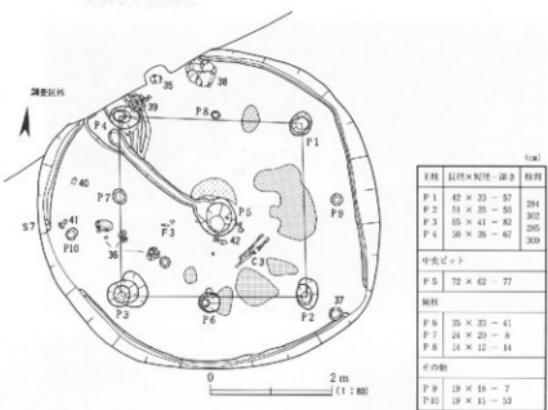
S 3

(1 : 2)

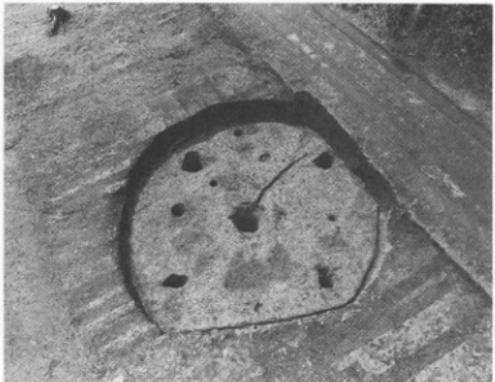


S 5

(1 : 2)



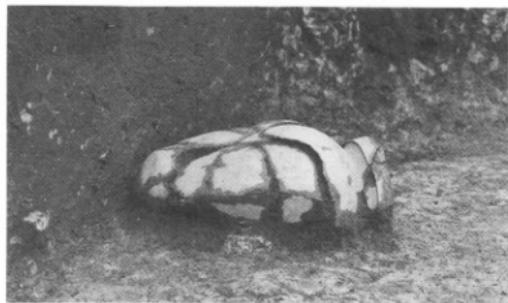
第22図 5号住居平面図



5号住居（東より）

5号住居 1号住居の南西側約25m離れた標高約43m付近に位置する焼失家屋である。住居の北西隅は調査区外のため未調査である。床面は、東隅・南東隅がやや角張る不整円形を呈し、その中央はほぼ中央ピットにある。床面の規模は、南北4.92m・東西5.05m、推定される床面積20m²を測り、比較的大型である。壁高は北側で57cm、南側で23cmを測る。床面はほぼ平坦で、周壁溝は南東隅と西隅の一部が途切れるが、幅8～10cm・深さ4～5cmで全体を巡る。主柱は4本で円弧状に並び、その中心もまた中央ピットにある。中央ピットの北西側からP 4南脇に、ほぼ直線的に幅14～18cm・深さ2～5cmの間仕切り溝が延びる。中央ピットの掘り方北側には橙褐色粘質土が敷かれている。補助柱は2本で、東隅と西隅に位置する。間柱は3本で、P 1-4・P 4-3・P 3-2それぞれのほぼ中央に位置する。焼上面は、ほぼ主柱穴内で大小8箇所認められた。特に、中央ピットとP 2の間の床面からは炭化材塊が出土し、焼土はこの付近に集中する。

遺物は比較的多く出土した。北側隅床面より壺(38・39)・壺(35)が、中央ピットの西側床面より刀子(F 3)、管玉(J 1)が出土した。壺(38)と床面の間には白色粘土塊があり、壺を横たえた状態であった。



5号住居土器（38）出土状況

（西より）



35



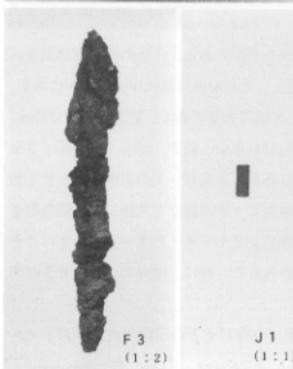
36



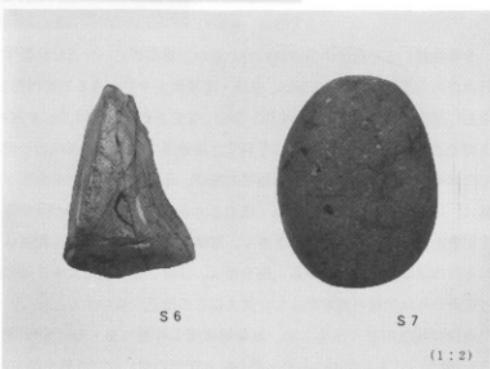
38



39



F 3
(1 : 2)

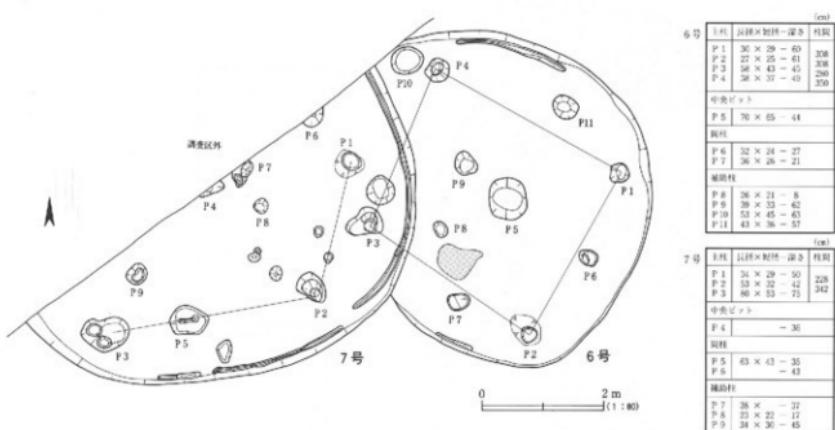


J 1
(1 : 1)

S 6

S 7

(1 : 2)



第23図 6・7号住居平面図

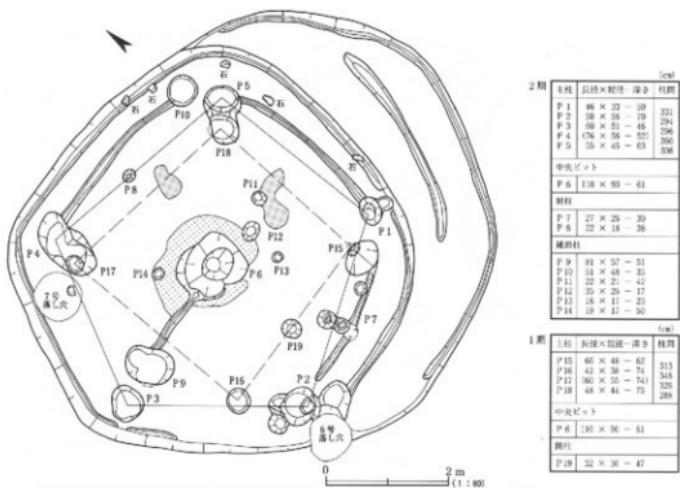


6・7号住居(東より)

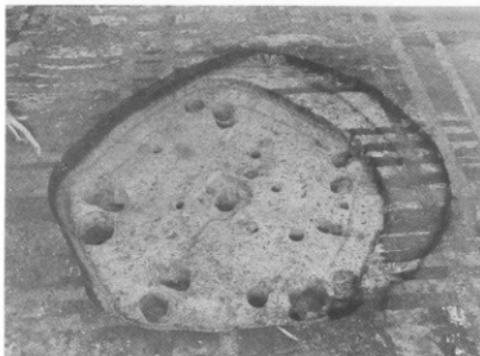
6号住居 5号住居の南西側約8m離れた標高約42m付近に位置する。住居の西側約5分の1は7号住居と切り合う。床面は南東隅が角張る不整円形を呈し、その中央はほぼ中央ピットにある。床面の規模は、東西4.95m、推定される床面積20.1m²を測り、比較的大型である。耕作機械の掘削が著しく、復元すると壁高は北側で30cmを測る。床面はほぼ平坦で、周壁溝は北側と南側で一部検出した。主柱は4本で円弧状に並び、その中心もまた中央ピットにある。補助柱は2本で北隅と北西隅に位置する。間柱は2本で、P1-2・P2-3のそれぞれほぼ中央に位置する。焼土面は、主柱穴内の南側に1箇所認められた。

遺物は少なく、壺片が埋土中から出土した。

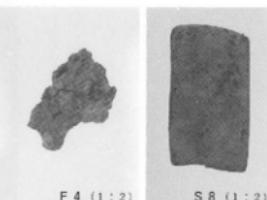
7号住居 6号住居の西側に切り合いながら位置する。住居の西側約2分の1は調査区外のため未調査である。床面の規模は、南北が6.55mを測り、不整円形を呈する。検出されたピットから推定すると床面積は17m²を測る。4本ないし5本の主柱穴を持つ。周壁溝は北東側から南西にかけて幅10cm・深さ2cm検出した。壁高は南側で28cmを測る。6号住居との切り合い関係から7号住居の方が新しい。



第24図 8号住居平面図

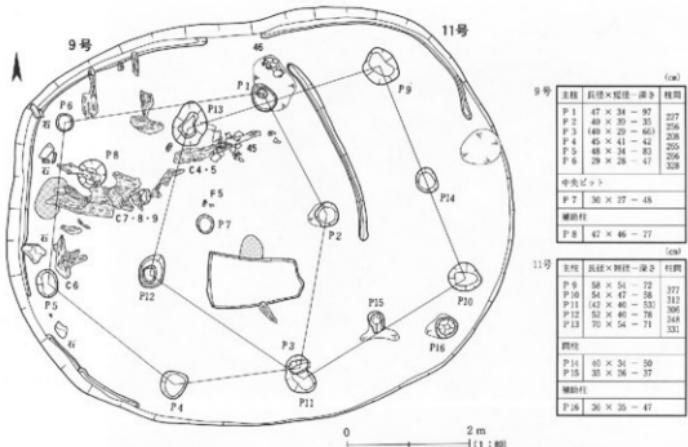


8号住居 (南西より)



F 4 (1:2) S 8 (1:2)

8号住居 7号住居の南側約3m離れた標高約42m付近に位置する。2期にわたって建て替えが行われている。1期の床面は、平面形は隅丸方形を呈し、その中心は中央ピットにある。床面の規模は、南北5.0m・床面積19m²を測る。主柱は4本で円弧状に並び、その中心もまた中央ピットにある。間柱はP15-16のはば中央に位置する。周壁溝は幅8~15cm・深さ2~4cmで、西側を除けばほぼ全周する。2期の床面は、平面形は五角形を呈し、その中心は中央ピットにある。床面の規模は、南北6.3m・東西5.8m、床面積29m²を測る。壁高は北側で67cmを測る。主柱は5本で円弧状に並び、その中心も中央ピットにある。補助柱は6本ある。間柱は2本あり、P1-2・P4-5のそれぞれはば中央に位置する。周壁溝は幅10~15cm・深さ3~5cmで、ほぼ全周するが南北隅で途切れる。中央ピットは方形の段を有し、掘り方には南東隅を除いて橙褐色粘土質土が敷かれる。中央ピットの西側からP9にはば直線的に幅8~12cm・深さ2~3cmの間仕切り溝がのびる。焼土面は1期のP15-18・P17-



第25図 9・11号住居平面図



9・11号住居（南より）

18のそれぞれほぼ中央で2箇所認められた。住居の北東隅から南隅にかけて、三日月状に一段高くなり、床面積は 9.6m^2 を測る。段の外縁床面には幅15~20cm・深さ2~3cmの溝が巡り、その内側、住居の外縁とのほぼ中央にも、幅15~25cm・深さ2~3cm・長さ3.5mmの溝が並行してのびる。

遺物は、床面より鉄鏃(F4)、埋土中より砥石(S8)・壺片が出土した。

9号住居 8号住居の南西側約5m離れた標高約41m付近に位置する。東側に位置する11号住居と切り合う。平面形は、耕作機械による掘削が著しいため不明瞭だが六角形を呈ると推定され、その中央はほぼ中央ピットにある。床面の規模は、南北6.2m・東西5.48m、床面積27m²を測り、比較的大型である。壁高は残りのよい北側で47cmを測る。床面はほぼ平坦で、周壁溝は幅10~15cm・深さ2~3cmで、南側では未検出だがほぼ全周するものと推定される。主柱は6本で円弧状に並び、その中心もまた中央ピットにある。P1の周辺には橙褐色粘質土混じりの貼床が施されていた。補助柱は1本で、中央ピットとP6の間に位置する。焼土面は中央ピットの北側、P5~6の間の2箇所に認められた。



9号住居炭化材出土状況

(東より)



(南より)



△9号住居土器出土状況

(南より)



▷9号住居鉄斧出土状況

(北より)



遺物は、P 1 の北側で壺（45・46）、中央ピットの北側脇で鉄斧片（F 5）がそれぞれ床面より出土した。また、床面には多量の炭化材が出土しており、建築部材が住居焼失後そのままの状態で残したと考えられる。11号住居との新旧関係は、9号住居の方が新しい。

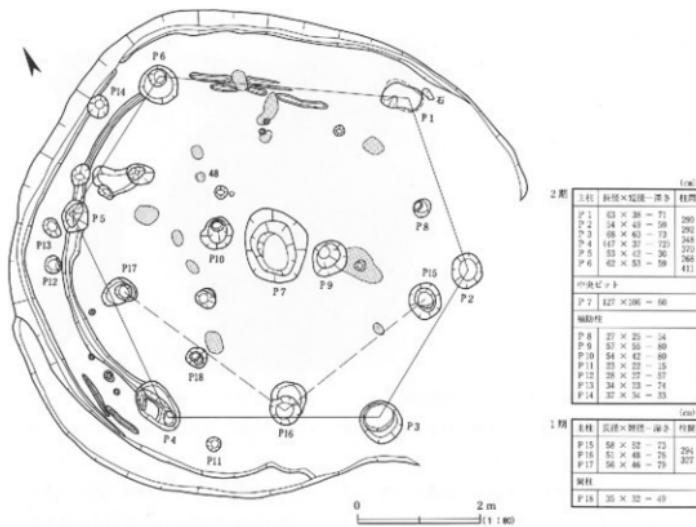
10号住居 調査区の北西隅、9号住居の南西約20m離れた標高約41m付近に位置する。耕作機械の掘削が著しく、遺存状態が非常に悪い。2期にわたって建て替えが行われている。1期の床面の平面形は不整円形を呈すると推定され、その中央はほぼ中央ピットにある。推定される床面の規模は、南北5.1m、床面積30m²を測る。主柱は4本、間柱1本を検出し、5本ないし6本が円弧状に並ぶと推定される。周壁溝は幅12~20cm・深さ2~3cmで北西側で約2分の1ほど検出した。2期の床面の平面形は不整円形で、その中心は中央ピットにある。床面の規模は、南北7.98m、床面積46m²を測り比較的大型である。壁高は北側で33cmを測る。床面はほぼ平坦で、周壁溝は東南側及び南側を除いて約2分の1検出し、幅15~20cm・深さ2~3cmでほぼ全周していたと考えられる。主柱は6本で円弧状に並び、その中心も中央ピットにある。補助柱は4本で、中央ピットの東西脇に2本、北西隅に2本位置する。焼土面は主柱より内側で11箇所認められ、ほとんどが小さい。

遺物は中央ピットの北西床面より壺(47)・壺(48)、中央ピット埋土中より鉄鎌（F 6）、P 4 埋土より鉈？（F 10）、埋土中より鉄鎌（F 7・8）・刀子？（F 9）・管玉（J 2）が出土した。この内壺(48)は頭部では水平に破損していること、接合部分が出土していないことから、器台に転用されていた可能性がある。

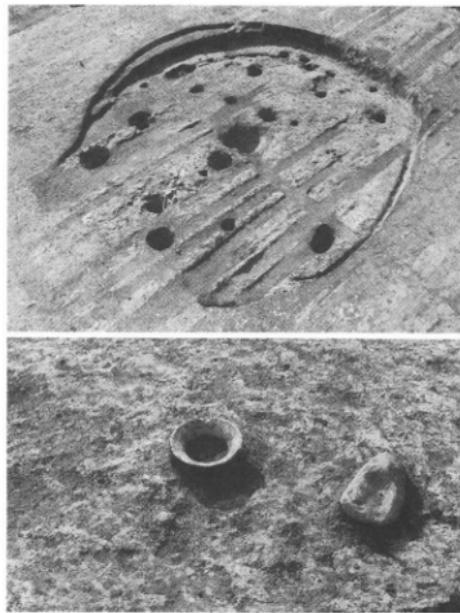
11号住居 9号住居の東側を切り合う。耕作機械による掘削が著しく、東側から南側にかけては消失している。主柱は5本検出し、円弧状に並ぶと推定される。間柱は2本、補助柱はP 10の南西側に1本検出した。壁高は北側で37cmを測る。周壁溝は、北側で一部検出した。幅10cm・深さ3~4cmを測る。

12号住居 8号住居と11号住居の間に隣接する。耕作機械の著しい掘削のため、遺存状態は非常に悪い。推定される床面の平面形は不整円形を呈し、その中央はほぼ中央ピットにある。主柱は4本検出し円弧状に並び、本来は5本あったと推定される。壁高は北側で24cmを測る。

1号掘立柱建物 1号住居の北側約2.5m離れて位置する。桁行1間、梁行1間の建物。桁行の方向は北から37度西偏し、等高線に平行する。柱穴間隔は、東側柱穴間2.78m・西側柱穴間2.74m・北側柱穴間1.86m・南側柱穴間1.81mを測り、長方形を呈する。柱穴内からの遺物は全く出土しなかった。

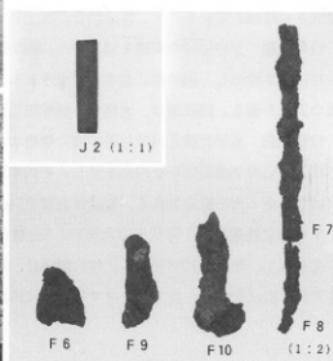


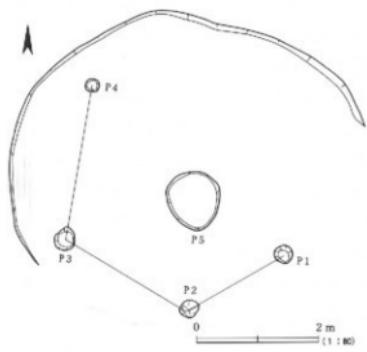
第26図 10号住居平面図



△10号住居

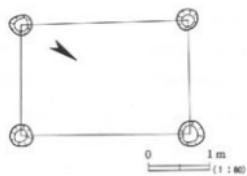
▽10号住居遺物出土状況（北より）





第27図 12号住居平面図

寸法	
柱	長径×短径-隙間
P1	23×28-42
P2	32×25-56
P3	37×23-52
P4	23×27-39
P5	30×38-25

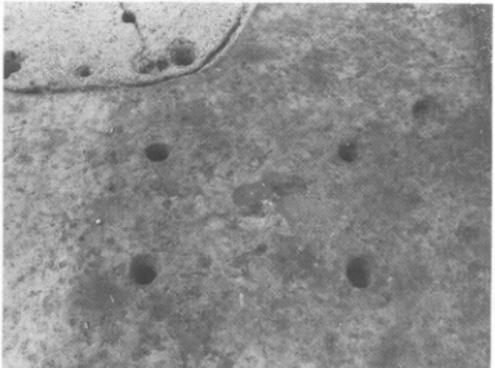


第28図 1号掘立柱建物平面図

12号住居 (南より)



1号掘立柱建物 (北東より)



1号貯蔵穴 4号住居の北東側約1.5m離れた標高約45m付近に位置しており、共存関係が考えられる。掘り方は3号落し穴と切り合う。検出面の平面形は不整形な楕円形で底面も楕円形を呈する。断面形はフ拉斯コ状を呈する。規模は検出面が長軸0.9m・短軸0.8m、底面が長軸1.2m・短軸0.7mを測り、深さは中央部で検出面から0.7mを測る。底面積は0.62m²を測る。南側はほぼ垂直に掘り込み、北側は大きく袋状に掘り込んでいる。

2号貯蔵穴 8号住居の西側約5m離れた標高約42.5m付近に位置しており、共存関係が考えられる。検出面の平面形は不整形な楕円形で底面も楕円形を呈する。断面形はフ拉斯コ状を呈する。規模は検出面が長軸1.5m・短軸1.1m、底面が長軸1.6m・短軸1.2mを測り、深さは中央部で検出面から0.6mを測る。底面積は1.47m²を測る。底面西側には直径0.3m・深さ0.2mのピットが存在する。

3号貯蔵穴 10号住居の南西側約17m離れた標高約40m付近に位置する。検出面の平面形は不整形な楕円形で底面も楕円形を呈する。断面形はフ拉斯コ状を呈する。規模は検出面が長軸1.2m・短軸1.0m、底面が長軸1.3m・短軸1.1mを測り、深さは中央部で検出面から0.4mを測る。底面積は1.12m²を測る。埋土中より甕が出土した。

4号貯蔵穴 10号住居の北東側約10m離れた標高約42m付近に位置しており、共存関係が考えられる。検出面の平面形は不整形な楕円形で底面は隅丸長方形を呈する。断面形はフ拉斯コ状を呈する。規模は検出面が長軸1.2m・短軸1.0m、底面が長軸1.4m・短軸1.2mを測り、深さは中央部で検出面から1.0mを測る。底面積は1.46m²を測る。

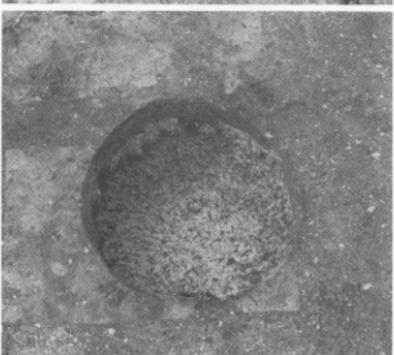
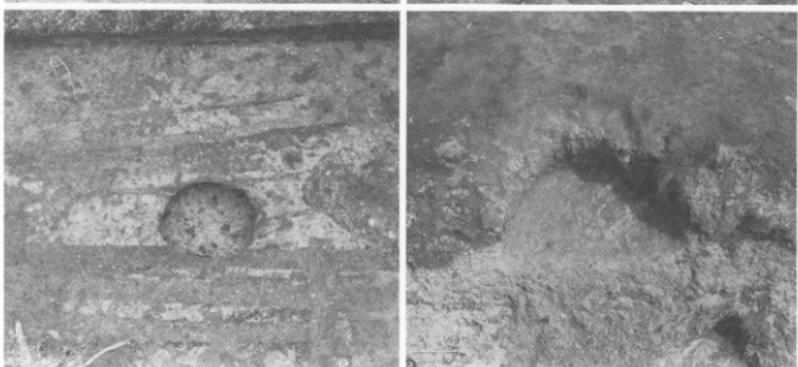
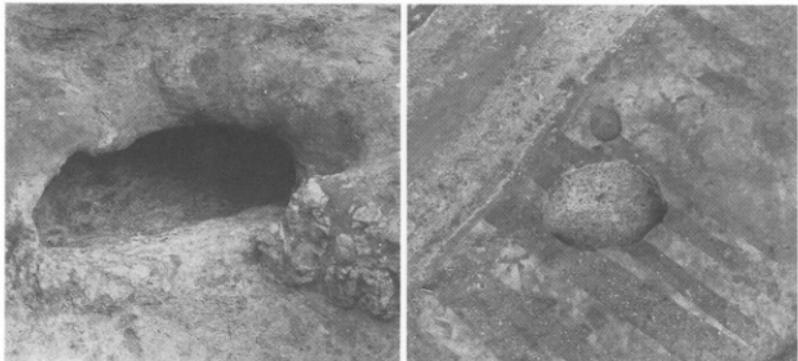
5号貯蔵穴 2号住居の南西約4m離れた標高約42m付近に位置しており、共存関係が考えられる。掘り方は畑地造成地の振削を受け、約2分の1しか遺存しない。検出面の推定される平面形は不整形な円形で底面も円形を呈する。断面形は底部より開口部が広がる逆台形状を呈する。規模は断面より、検出面が1.6m、底面が1.1mを測り、深さは中央部で検出面から0.3mを測る。

6号貯蔵穴 9号住居の南側約6m離れた標高約41m付近に位置しており、共存関係が考えられる。検出面の平面形は不整形な円形で底面も円形を呈する。断面形はフ拉斯コ状を呈する。規模は検出面が長軸1.3m・短軸1.3m、底面が長軸1.5m・短軸1.3mを測り、深さは中央部で検出面から0.55mを測る。底面積は1.39m²を測る。北西側だけはほぼ垂直に掘り込む。

1号落し穴 丘陵尾根筋から南斜面にやや下る標高約43.5m付近に位置し、1号墳より北西側に約2.5m離れて位置する。検出面の平面形は不整形な円形で底面も不整円形を呈する。断面形はすぼまり型である。規模は長軸0.86m・短軸0.85m、深さは中央部で0.94mを測る。底面規模は長軸0.45m・短軸0.40mである。底面の中央部には杭痕跡のピットが1個存在する。規模は径15cm・深さ37cmを測る。

2号落し穴 丘陵尾根筋の標高約44.5m付近に位置し、1号住居より南東側に約2.5m離れて位置する。検出面の平面形は不整形な楕円形で底面は円形を呈する。断面形はすぼまり型である。規模は長軸1.30m・短軸1.10m、深さは中央部で1.60mを測る。底面規模は長軸0.45m・短軸0.42mである。底面には杭痕跡のピットではなく平坦面である。

3号落し穴 丘陵尾根筋から南斜面にやや下る標高約45m付近に位置し、4号住居より北東側に約2m離れて位置する。北側は1号貯蔵穴と切り合う。検出面の平面形は不整形な円形で底面は円形を呈する。断面形はすぼまり型である。規模は長軸0.95m・短軸0.90m、深さは中央部で1.64mを測る。底面規模は、長軸0.60m・短軸0.54mである。底面には北側と東側寄りに杭痕跡のピットが2個存在する。規模は北側で径8cm・深さ9cm、東側で径9cm・深さ8cmを測る。



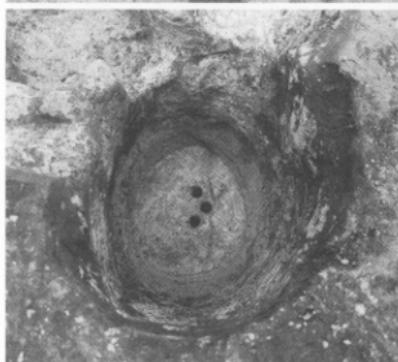
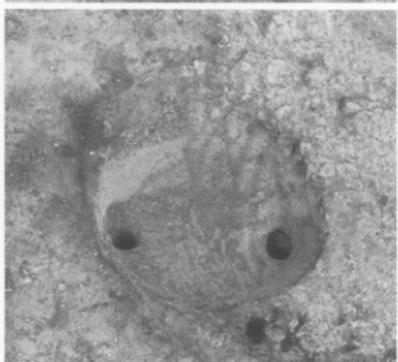
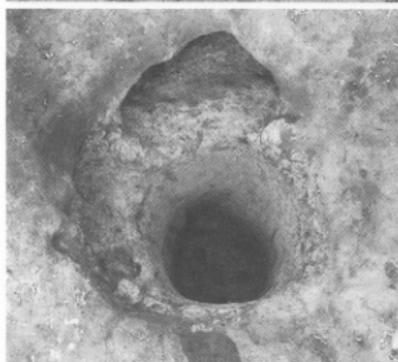
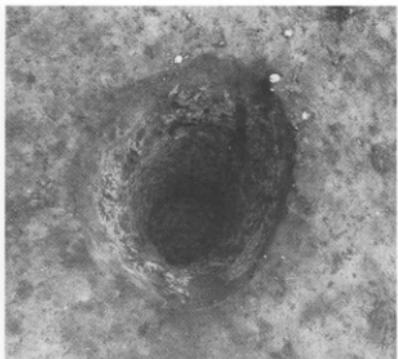
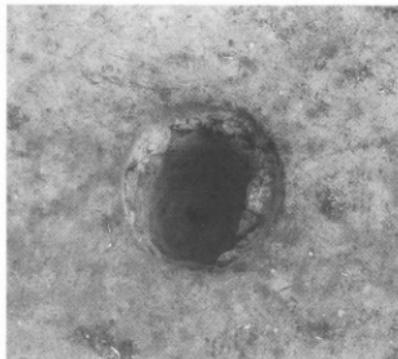
△1号貯蔵穴（南より）

▽3号貯蔵穴（北東より）

△2号貯蔵穴（南西より）

▷5号貯蔵穴（西より）

▽6号貯蔵穴（南より）



△1号落し穴（西より）

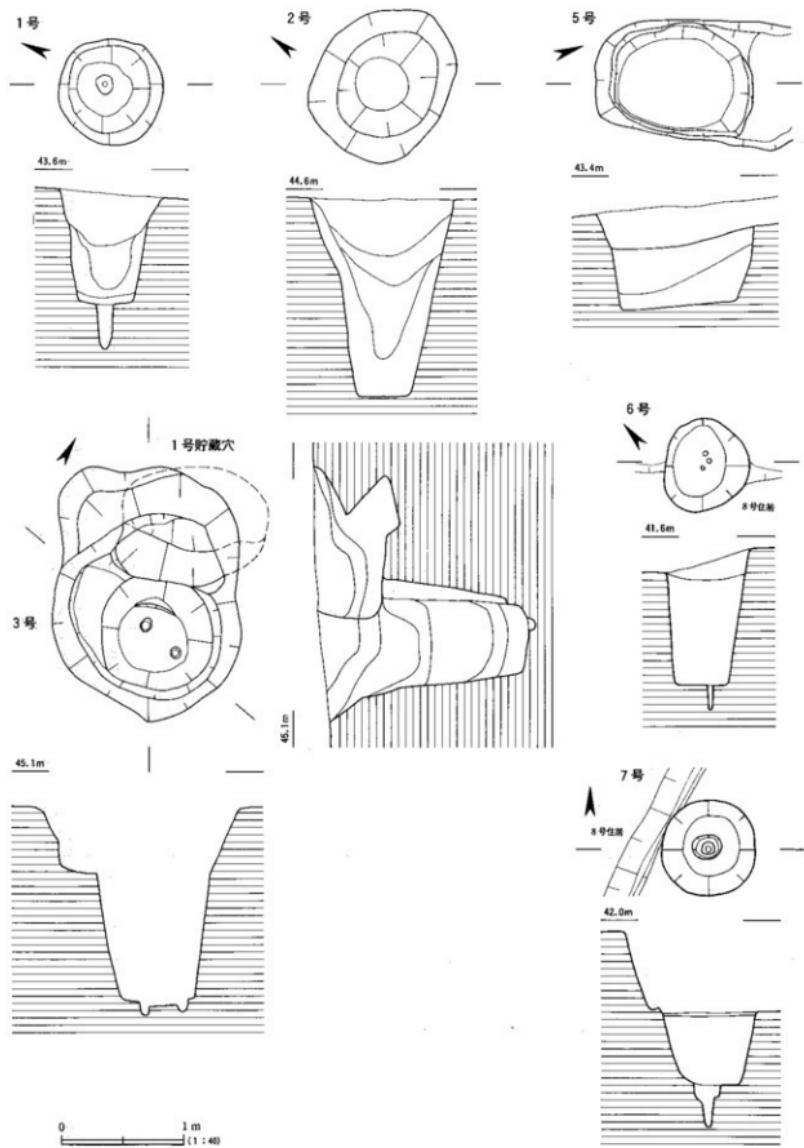
◁1号貯蔵穴・3号落し穴（南東より）

▽6号落し穴（西より）

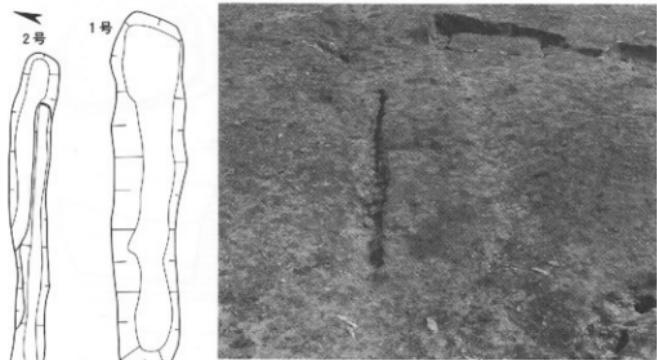
△2号落し穴（西より）

▷4号落し穴（西より）

▽7号落し穴（北西より）



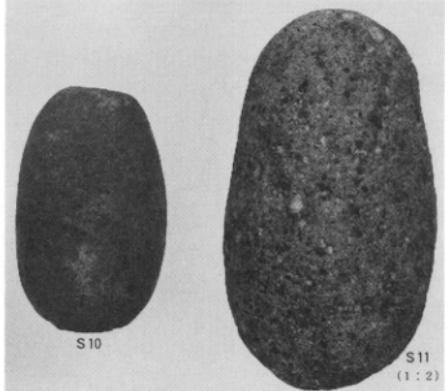
第29図 1号貯藏穴、1～3・5～7号落し穴遺構図



1・2号溝状遺構
(西より)

第30図

1・2号溝状遺構平面図



4号落し穴 調査区東側の南斜面標高約43m付近に位置し、4号墳の周溝西端および2号土壙と切り合う。検出面の平面形は不整形な楕円形で底面も楕円形を呈する。断面形はすぼまり型である。規模は長軸1.25m・短軸1.08m、深さは中央部で0.58mを測る。底面規模は長軸1.08m・短軸0.84mである。底面の南北両端には杭痕跡のピットが2個存在する。規模は北側で径12cm・深さ30cm、南側で径13cm・深さ25cmを測る。

5号落し穴 南斜面の標高約42m付近に位置し、2号墳の前庭部と切り合う。検出面の平面形は不整形な楕円形で底面も楕円形を呈する。断面形はすぼまり型である。規模は長軸1.18m・短軸0.95m、深さは中央部で0.82mを測る。底面規模は長軸0.90m・短軸0.75mである。底面には杭痕跡のピットではなく平坦面である。

6号落し穴 比較的傾斜のゆるやかな標高約42m付近に位置し、8号住居の南隅と切り合う。検出面の平面形は不整形な円形で底面も不整円形を呈する。断面形はすぼまり型である。規模は長軸0.77m・短軸0.68m、深さは中央部で1.00mを測る。底面規模は長軸0.58m・短軸0.42mである。底面の中央部には杭痕跡の小ピットが3個存在する。小ピットの規模は径4cm・深さ20cmを測り、一定である。杭は直接底面に差し込まれたものと考えられる。

7号落し穴 6号落し穴の北側約3m離れた標高約42m付近、8号住居内の北西隅に位置する。上部は住居によって削平されており、掘り方は住居の貼床によって塞がれていた。検出面の平面形は円形で底面も円形を呈する。断面形はすさまり型である。規模は長軸0.80m・短軸0.75m、深さは中央部で0.60mを測る。底面規模は長軸0.50m・短軸0.45mである。底面の中央部には杭痕跡のピットが1個存在する。規模は径22cm・深さ10cmを測る。このピット底部には径10cm・深さ25cmの小ピットがあり、杭を差し込み埋めたものと考えられる。

1号溝状遺構 2号住居の南東側約5m離れた標高約42m付近に位置する。幅1.0~1.2m・長さ6m・深さ0.15mの規模で等高線に沿って東西に延びる。

2号溝状遺構 1号溝状遺構の北側に約2mの間隔をあけて並行する。幅0.5~0.6m・長さ6.45m・深さ0.08~0.20mの規模で、斜面の低い側が一段深くなる。底面より蔽石(S10・11)が出土した。

2. 遺物

古墳出土土器(第31図)

両長谷遺跡では、検出した古墳すべてが畠地造成による削平や掘削を受けている。8号墳を除けばほとんどが石室基底部にまで掘削が及んでおり、検出した古墳の数に比べて、出土遺物の数量は非常に少なかった。出土した遺物は須恵器で、玄室内、羨道、前庭部、周溝内から出土したほかは、ほとんどが埋土中および攪乱土中であった。出土位置・法量その他は表にまとめた。

3号墳

坏蓋(1・2) 扁平な天井部に環状つまみをもち、口縁部は下方へ屈曲する。天井部外面は逆時計まわりのヘラケズリ後1はナデ。2のつまみ内面に板目痕跡あり。

坏身(3・4) 3は底部と体部の境界は丸い。高台は薄く内側につく。底部外面は板目痕跡を残す。1とセット。4は口縁部は外上方に開き、底部と体部の境界は稜をなす。高台は短く外へふんばる。

4号墳

坏蓋(5) 天井部外面ヘラ切りナデ仕上げ。

5号墳

坏蓋(6) 扁平な器体に口縁端部より短く突出するかえりをもつ。天井部外面多方向のヘラケズリ。

坏身(7~10) 8・9は底部外面ヘラ切り未調整。10は底部から体部の境界まで丁寧な逆時計まわりのヘラケズリ。7は矮小化した受部をもつ。体部から底部の外面はヘラ切り後ナデ。

瓶類(11) 平瓶の口縁か。焼成あまり。

8号墳

坏蓋(12・13) 口縁端部より突出したかえりをもつ。12は高くふくらむ天井部を持つが、13の器高は低い。天井部外面はヘラケズリを施し、12は口縁部までおよぶ。天井部中央にヘラ切り痕跡あり。

坏身(14・15) 14は大型、底部外面ヘラ切り未調整。15は底部は平らで体部は上方へほぼ垂直に立ち上がる。底部外面はヘラケズリを施す。15と17はセット。

坏蓋(17~19・25-1) 17・18は口縁端部より突出したかえりをもつ。天井部は扁平。25-1は子持器台の蓋、小型で扁平。天井部のほぼ中央部に宝珠つまみが付く。内面のかえりは口縁端部と同程度下方へのびる。19は天井部片。天井部に環状つまみをもつ。17・18・25-1は口縁端部まで逆時計まわりのヘラケズリ。天井部中央にヘラ切り痕跡を残し、ケズリが及ばない。19は天井部外面ヘラケズリ後ナデ。

坏身(20) 底部と体部の境は丸く、体部は上方へ立ち上がる。底部外面周辺部逆時計まわりのヘラケズリ。13と20はセットの可能性あり。

高坏（21） 塹状の坏部に小さい脚がつく。脚の基部は細く、脚端部は大きく広がり、脚端部は外方へ屈曲。坏底部外面逆時計まわりのヘラケズリ。脚部は2方向に切り込み線。

平瓶（22） 口縁部は漏斗状。体部上面はやや扁平で底部も安定した平坦。器体は総じて丸みをもち稜線をみなない。底部外面ヘラ記号。

子持器台（25） 小型の坏身（-2）をのせた厚手の盤状の破片と、小型の高坏（-4）をのせた同様の破片があり、遊離した破片である坏蓋（-1）・平瓶（-5）・壺（-3）も小型であること、胎土・焼成・色調が類似していることから、同一個体と推定された。高坏型器台の受部内面に小型土器各種を配した子持器台で、個体数は1個とみてよいと思われる。器台脚部の破片は出土していない。

器台にのる小型土器の最大径、即ち坏蓋外径・高坏口径・平瓶最大胴径は近似値を示し、大きさに統一性が認められる。従って口縁部しか残っていない壺も、平瓶と同大同形のものと考えてよからう。小型土器の配列・位置を復元すると図のようになる。●器台の口縁端面の幅は、坏身側と高坏側では著しく異なり、坏身は高坏の両隣にはこないので反対側へもっていった。●平瓶と高坏は焼成時に灰がかかり、平瓶は高坏の左側に位置していたものと推定された。●坏身がついている器台受部には坏身の右隣に小型土器をつけた際のナデ痕跡が認められ、坏身とその部分の距離がほぼ確定された。小さい器台にしてはその距離は長く、小型土器は4個体しかのらない。●坏身は高坏に比べて器台のやや外側につけられ、これは丸底の坏身と据ひろがりの高坏脚の違いと考えられることから、平瓶・壺は坏身と同様外側に配置させた。

器台受部は広い平底に内溝する口縁部がつく。口縁端部は水平面をなし、内側に粘土紐をめぐらせて稜をつくる。口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切り後、周辺2~3周を逆時計まわりのヘラケズリ。

坏身（-2） 底部外面ヘラケズリ未調整。器台との接合は、粘土を足さず坏身を器台に押しつけているため、その部分は器壁が薄く器形も深くなっている。

壺（-3） 直線的に開く口縁部で中位に凹線が2条めぐる。

無蓋高坏（-4） 坏底部と口縁部の境界に小さな稜をつくる。口縁部外面には列点を施すが全周しない。脚部は坏底部の中心からずれている。脚部中位に凹線が2条めぐる。裾部を器台に押しつけて接合させ、脚端部の形状を留めていないが外側は内側に比べて粘土の膨らみを残している。接合後、外方より円孔を3箇所穿つ。

平瓶（-5） 口縁部に比して体部は小さい。口縁部中位に凹線が2条めぐる。肩部は稜をなし、界線をめぐらすがナデ消されている。

土壙墓出土土器

2号土壙墓

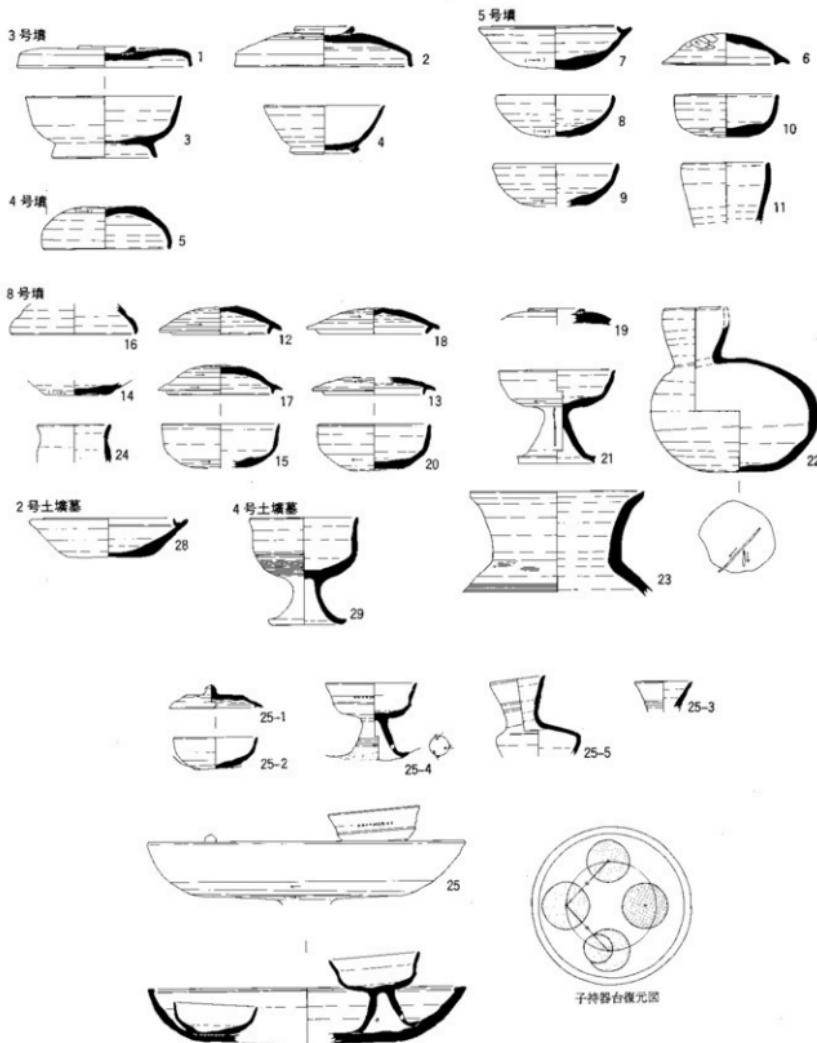
坏身（28） 底部は平たく、外方向へのびる体部で受部をもつ。短い立ち上がりが上方へ屈曲する。

4号土壙墓

高坏（29） 底部と体部の境界は屈曲しほぼ垂直に外上方へ立ち上がる。脚の基部は細く、脚端部は大きく広がり、脚端部は外方へ屈曲。底部外面はカキ目を施す。脚部は、焼け歪みにより大きく変形する。

住居出土土器

検出した住居のほとんどが耕作機械の掘削を受け、消失している。1~5号住居は比較的残りが良かったものの、他の住居は掘削が床面まで及んでいた。このため住居内の遺物のほとんどが攪乱土中の出土であった。基本的に床面出土土器について述べる。出土位置・法量その他は表にまとめた。



第31図 3～5・8号墳、2・4号土塚墓出土遺物図

1号土壙墓（第32図）

甕（26） ほほ直線状にひろがる二重口縁。外面に櫛描沈線を施した後、ナデ消す。屈曲部は丸くおさめる。頭部外側は横方向のヘラミガキ。内面頭部以下は右方向のヘラケズリ、口頸部はヘラミガキ。

ミニチュア土器（27） 体部下半から底部の破片。底部は平底で、体部は直線的に立ち上がる。体部は板状工具で成形。縦方向のハケメが残る。内面および底部はナデで仕上げる。

1号住居（第32図）

脚台部（30） 台付壺または台付壺の底部及び脚台部と考えられる。脚部は外に開き、端部は面をなす。外面は横方向のヘラミガキを施す。脚台部内面は器面が荒れ不明瞭だが、ヘラケズリ後端部のみヨコナデする。

甕（31・32） 外反する二重口縁で、外面には櫛描沈線を施した後、ヨコナデを施す。縁部は丸く仕上げる。31は内面頭部以下を左方向のヘラケズリ、口頸部を横方向のヘラミガキする。口縁部内面及び外面に赤色顔料残る。32は肩部に連続する押圧文を施す。内面頭部以下左方向のヘラケズリ。口縁部はヨコナデ。

台部（33） 台付鉢の脚台部と考えられる。鉢の底部内面はヘラミガキ。外面はナデで仕上げるが、底部と脚部の境界に縦方向のハケメが残る。脚台部の内面は右方向のヘラケズリし、中央を指オサエする。外面及び鉢部の内面に赤色顔料を塗彩する。

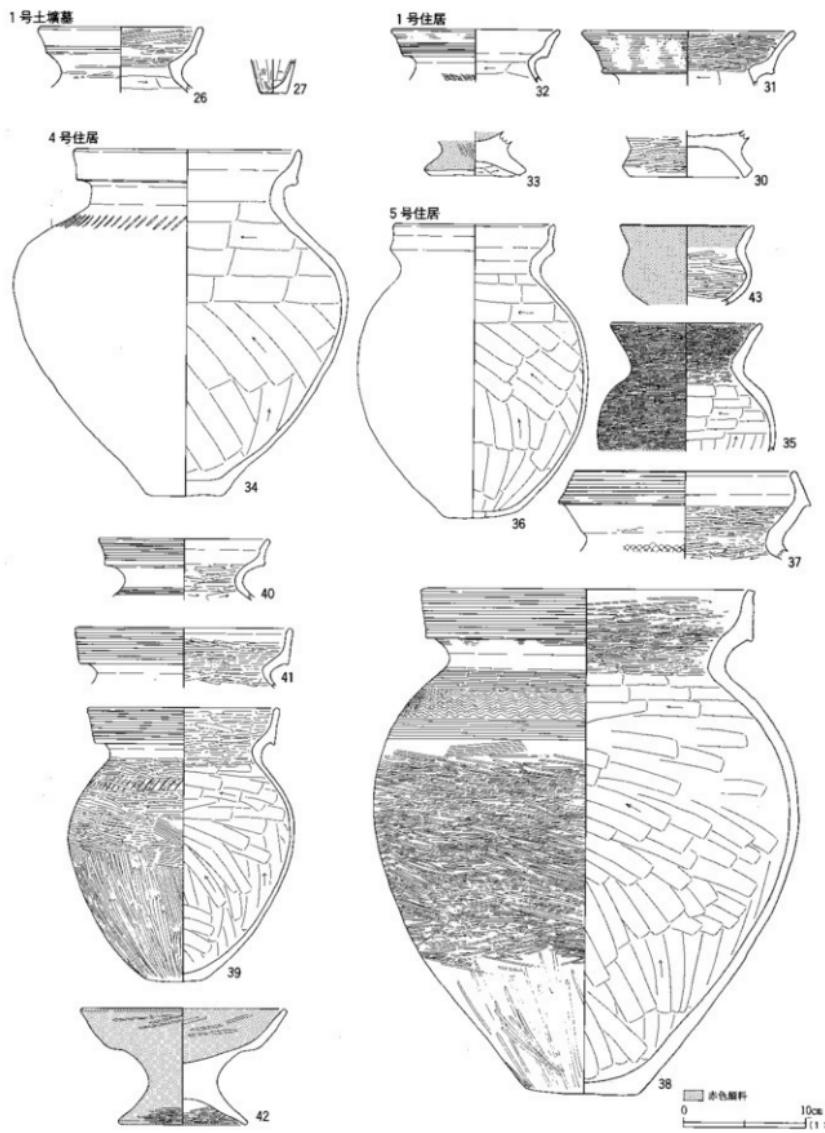
4号住居（第32図）

壺（34） わずかに外傾する二重口縁。縁部、屈曲部とともに丸くおさめる。肩がよく張り、底部は安定した平底。外面は体部下半から最大胴径位までを縦方向のヘラミガキ、最大胴径位以上を横方向のヘラミガキする。肩部に刻み目を施す。口縁部はヨコナデ。内面は体部下半から最大胴径位までを斜め方向のヘラケズリ、最大胴径位から頭部直下までを左方向のヘラケズリする。底部外面から最大胴径位まで、煤が付着する。

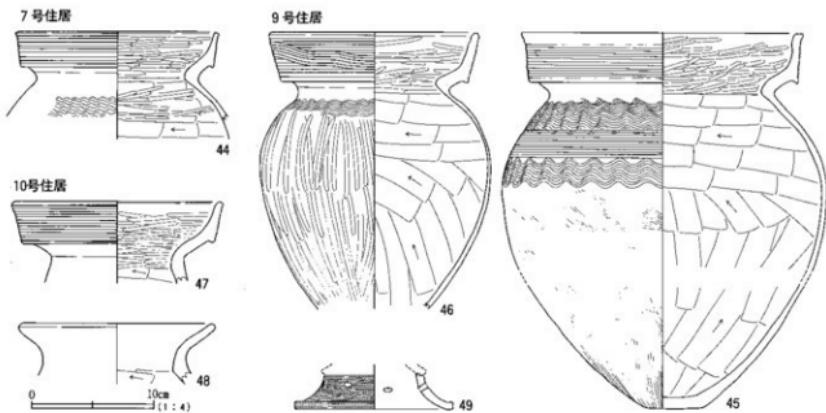
5号住居（第32図）

壺（35～37） 35は外傾する口縁部を持ち、端部は丸く仕上げる。外面および口頸部内面を、横方向のヘラミガキする。ヘラミガキと同じ範囲に赤色顔料を塗彩する。内面最大胴径位以下を縦方向のヘラケズリ、最大胴径位から頭部直下までを左方向のヘラケズリする。36は直立する二重口縁で、縁部は丸い。底部は焼成後に穿孔する。風化のため器面が荒れ各部の調整は不明瞭であるが、体部内面は底部から最大胴径位までを縦から斜めのヘラケズリ、最大胴径位から頭部直下までを左方向のヘラケズリし、口縁部は内外面ヨコナデする。体部外面および口縁部内外面に赤色顔料塗彩の痕跡あり。37は内傾する二重口縁で、外面に櫛描沈線が、肩部には同一原体による連続する押圧文が施される。内面は頭部直下からは左方向のヘラケズリ、頭部はヘラミガキ、口縁部はヨコナデする。

甕（38～41） 口縁部は直立ないしやや外反する二重口縁で、外面には櫛描沈線が施される。端部は丸く仕上げるもの（39～41）と、角張るもの（38）がある。屈曲部は垂れ下がるもの（38・39・41）と、丸くおさめるもの（40）がある。頭部内面（40・41）または口頸部内面（38・39）を横方向のヘラミガキし、頭部以下をヘラケズリする。38は大型。体部は倒卵形で、底部は安定した平底。口縁部および肩部に同じ原体による櫛描沈線と波状文が施される。外面は体部下半を縦方向のヘラミガキし後、上半を横方向のヘラミガキする。頭部下面と肩部の櫛描沈線からやや下がった位置に横方向のハケメがのこる。外面には赤色顔料塗彩の痕跡あり。内面は頭部以下最大胴径位までを左方向のヘラケズリ、下半は縦から斜め方向のヘラケズリ。40は口縁部および頭部直下に櫛描沈線が施される。39は倒卵形の体部と大きめの平底を持つが、底部と体部の境界はやや明瞭さを欠く。体部外面はハケメ調整をした後、最大胴径位以下を縦方向のヘラミガキし、最大胴径位から頭部までを横方向のヘラミガキする。肩部に口縁部外面の櫛描沈線と同じ原体による刻み目を施す。外面体部から口縁端部まで煤付着。内面底部から最大胴径位までは斜め方向のヘラケズリ、最大胴径位から頭部直下までは左方向のヘラケズリ、口頸部は



第32图 1号土壤墓、1·4·5号住居出土遗物图



第33図 7・9・10号住居出土遺物図

横方向のヘラミガキ。40は内面頸部以下を右方向のヘラケズリし、頸部は横方向のヘラミガキ、口縁部はヨコナデする。外面肩部に多条の平行沈線を施す。41は内面頸部以下を左方向のヘラケズリし、口縁部をヨコナデ調整した後、頸部を横方向のヘラミガキする。

高坏(42) 坏部はやや内湾しながら外へのび、端部はやや角張り、脚部は低く直線状にひらき、端部は丸い。風化のため調整は不明瞭だが、外面、坏部内面、腰部内面までヘラミガキする。脚部内面はナデ仕上げ。ヘラミガキしている範囲には赤色顔料を塗彩する。

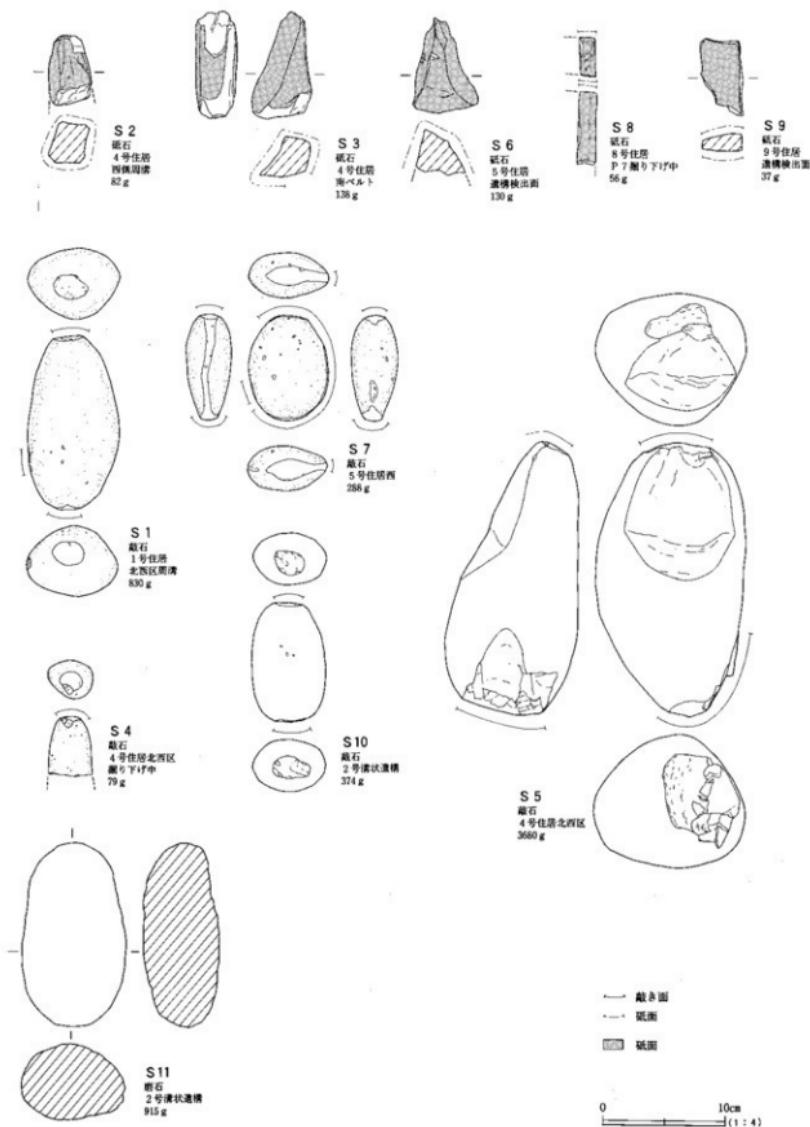
壺(43) 小型の壺。扁平な球形の体部と、外反する口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げる。最大胴径位以下は左方向のヘラケズリをした後、やや疎な横方向のヘラミガキで仕上げる。口縁部は内外面をナデ、体部外面はヘラミガキする。外面および口縁部の内面まで、赤色顔料を塗彩する。

7号住居 (第33図)

壺(44) やや外傾する二重口縁で、外面には櫛描沈線が施される。端部はわずかに外反し面をなす。肩部外面には、口縁部の櫛描沈線と同じ原体による波状文が施される。内面頸部以下は左方向のヘラケズリし、頸部より上は横方向のヘラミガキする。頸部より下にも一部横方向のヘラミガキがおよぶ。

9号住居 (第33図)

壺(45・46) 直立(45)ないしは外傾(46)する二重口縁で、外面には櫛描沈線を施す。屈曲部は垂れ下がる。肩部には口縁部の櫛描沈線と同一原体による波状文・平行沈線を施す。体部は倒卵形で、45の底部は平底である。46は口縁端部が外反し面をもつ。口縁部外面の櫛描沈線は上下端をヨコナデによって消される部分がある。肩部には波状文を2条施した後、平行沈線を1条施す。体部外面は下半を縱方向の、最大胴径付近は横または斜め方向のハケメ調整した後、ナデで仕上げる。内面は底部から最大胴径位までを縱方向のヘラケズリ、最大胴径位から頸部直下までを左方向のヘラケズリ、口頸部内面は横方向のヘラミガキである。46は体部外面は縱方向のヘラミガキ、体部内面は下半は縱方向のヘラケズリを、最大胴径位から頸部までを横方向のヘラケズリをおこなう。口頸部内面は横方向のヘラミガキをおこなう。



第34図 1・4・5・8・9号住居、2号溝状遺構出土石器遺物図

10号住居（第33図）

壺 (47) やや外にひらく二重口縁で、外面に櫛描沈線が施される。縁部はわずかに外反し丸くおさめる。屈曲部は垂れ下がる。頭部以下は左方向のヘラケズリ、頭部から口縁端部近くまで横方向のヘラミガキする。

壺 (48) 外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。頭部直下から左方向のヘラケズリするが、一部両方向に砂粒が動く。口縁部は横ナデ。外面にわずかに赤色顔料がのこる。

高坏 (49) 高坏の裾部。外湾して開き、端部は面をなし中に浅い凹面をもつ。円形の透かしが二孔一対で3組穿たれる。外面は横方向のヘラミガキ、内面及び端部はナデで仕上げる。外面には赤色顔料を塗彩する。

遺物一覧表

〔法量()は推定値〕

出土位置	No	器種	法量(cm)	質	胎土・焼成・色調・遺存度
3号墳 前庭部上面	1	須恵器 壺 蓋	口径 14.0 器高 1.8	11・45	胎土は密。1~3mmの大長石を含む。細かい黒色粒子を含む。焼成良好。淡灰黒色。完形。
	2		口径 14.3 器高 3.3	11・45	胎土は密。1mmの大長石を多量に含む。細かい黒色粒子を含む。焼成普通。淡黒灰色をなすが、内面に直径8cm程の色調の違う部分がある。口縁部1/2欠損。
	3	須恵器 壺 身	口径 (12.6) 脚径 8.2 器高 (5.1)	11・45	胎土は密。1mmの大長石を多量に含む。細かい黒色粒子を含む。焼成ややあまい。淡灰黒色。体部・口縁部をほとんど欠く。
	4		口径 (9.9) 脚径 4.8 器高 4.0	11・45	胎土は密。1mmの大長石を含む。黒色粒子を多量に含む。淡灰色。内面は自然模がかり器画が観れる。
4号墳 主体部検出面	5	須恵器 壺 蓋	口径 10.3 器高 3.6	12・45	胎土は密。1mmの大長石を含む。焼成普通。暗灰色。
5号墳 玄室内床面	6	須恵器 壺 蓋	口径 8.1 器高 2.6	14・45	胎土は密。7mm以下の長石を含む。焼成普通。外青灰褐色、内面淡灰褐色。完形。
	7	須恵器 壺 身	口径 10.2 器高 3.6	14・45	胎土は密。1mmの大長石を含む。黒色粒子を多量に含む。焼成良好。淡黒灰色。
	8		口径 (9.6) 器高 (3.5)	13・45	胎土は密。1mmの大長石を含む。黒色粒子を多量に含む。焼成普通。黒灰色。外表面自然模がかり器画が観れる。1/2欠損。
	9	須恵器 壺 身	口径 (10.0) 器高 (3.5)	14・45	胎土は密。1mmの大長石を含む。焼成普通。暗青灰色。3/4。
	10		口径 8.3 器高 3.5	14・45	胎土は密。1mmの大長石を含む。黒色粒子を少量含む。焼成普通。淡灰褐色。ほぼ完形。
	11	須恵器 瓶	口径 7.0	45	胎土は密。1mmの大長石を含む。焼成普通。明灰褐色。口縁部のみ。
	12	須恵器 壺 蓋	口径 7.9 器高 2.3	45	胎土は密。1~3mmの大長石を多量に含む。焼成あまい。淡黄灰褐色。完形。
	13		口径 (8.1)	45	胎土は密。1~2mmの砂粒を多量に含む。焼成良好。多少焼き歪みを生じる。灰黒色~淡黒灰色。1/2。
8号墳 玄室内床面	14	須恵器 壺 身		45	胎土は密。1mmの大長石をわずかに含む。焼成良好。淡黒灰色。底部のみ。
	15		口径 (9.6) 器高 (3.6)	45	胎土は密。1mm以下の長石を含む。焼成普通。淡灰色。口縁部1/3。

(法量()は推定値)

出土位置	No.	器種	法量(cm)	頁	胎土・焼成・色調・遺存度
8号墳 後道	16	須恵器 坏蓋	口径 (10.1) 器高	45	胎土は密。1mm大の長石を含む。焼成普通。淡灰色。口縁部片 1/4。
	17		口径 8.5 器高 2.3	45	胎土はやや疊。1~2mmの砂粒を少量含む。焼成ややあまい。淡 黒灰色。1/2。
	18		口径 10.9 器高 2.1	45	胎土は密。5mm大の長石を多量に含む。焼成普通。淡褐色。完 形。
	19			45	胎土はやや疊。焼成良好。淡黒灰色。天井部小片。
	20	須恵器 坏身	口径 9.0 器高 3.8	45	胎土は密。3mm以下の長石を含む。焼成普通。暗灰色。口縁部一 部欠損。
	21	須恵器 高坏	口径 (9.4) 脚径 (6.1) 器高 7.7	45	胎土はやや密。1mm大の砂粒を多量に含む。焼成良好。黒灰色。 坏部1/3。脚端部1/4欠損。
	22	須恵器 平瓶	口径 5.0 器高 13.6	17・45	胎土は密。1mm大の長石を含む。焼成普通。淡灰色。ほぼ完形。
	23	須恵器 広口壺	口径 (14.3)	45	1mm大の長石を含む。焼成普通。淡灰色。口縁部小片。
	24	須恵器 壺	口径 (6.0)	45	2mm以下の長石を含む。焼成普通。暗褐色。口縁部1/8。
	25	須恵器 子持替台	口径 (25.8)	17・45	1mm大の長石を含む。焼成普通。暗褐色。受部1/3。
後道上面	-1	坏蓋	口径 6.6 器高 1.9	17・45	完形。
	-2	坏身	口径 (6.8) 器高 2.7	17・45	口縁部1/3欠損。
	-3	蓋	口径 (4.7)	45	口縁部片。
	-4	高坏	口径 (7.4) 脚径 (6.2) 器高 (6.1)	17・45	口縁部1/2欠損。
	-5	平瓶	口径 4.6 最大胴径 (7.0)	17・45	口縁~体部片。
	26	弥生土器 甕	口径 (13.1)	47	1mm以下の砂粒を多く含む。黑色粒子・茶色粒子を含む。焼成普 通。灰褐色。口頂部片。
1号土壤墓 埋土	27	弥生土器 ミニチュア 土器	底径 (2.0)	47	1mm大の砂粒を少量含む。焼成普通。灰褐色。黒斑有り。体部~ 底部片。
	28	須恵器 坏身	口径 (10.7) 器高 3.3	45	胎土は密。2mm以下の長石を含む。焼成普通。淡灰色。1/6。
4号土壤墓	29	須恵器 高坏	口径 8.7 脚径 (5.8) 器高 8.8	21・45	胎土は密。1~2mm大の砂粒を多量に含む。焼成良好。坏部外側 ・脚部内面灰褐色、坏部内面淡黒灰色。完形。
1号住居 床面 埋土	30	弥生土器 脚台部	脚径 9.4	47	1~2mm大の砂粒を多量に含む。焼成普通。淡褐色。脚台部の み完存。
	31	弥生土器 甕	口径 (17.2)	47	1~2mm大の砂粒を少量含む。焼成良好。淡褐色。口縁部内外 赤色頬料残る。口縁部片。

(法量()は推定値)

出 土 位 置	No	器 様	法 量(cm)	頁	胎 土 ・ 焃 成 ・ 色 調 ・ 遺 存 度
1号住居 埋土	32	弥生土器 甕	口径 (13.6)	47	1~2mm大の砂粒をわずかに含む。雲母多く含む。赤褐色の粒子をわずかに含む。焼成良好。淡白褐色。口縁部片。
	33	弥生土器 台 部	脚径 (7.5)	47	1mm大の砂粒を多量に含む。黒色粒子、赤褐色粒子をわずかに含む。焼成良好。淡褐色。外面、鉢部内面赤色顔料塗彩。脚台部片。
4号住居 床面	34	弥生土器 甕	口径 18.3 最大胴径 27.2 器高 28.6	28·47	1~5mmの砂粒を多量に含む。焼成普通。淡橙褐色。外面煤付着。完形。
5号住居 床面	35	弥生土器 甕	口径 12.0 最大胴径(14.5)	30·47	1~3mm大の砂粒を多量に含む。焼成普通。淡黄褐色。外面、口縁部内面赤色顔料塗彩。体部下半及び底部欠損。
	36		口径 12.9 最大胴径 18.9 器高 24.3	30·47	1~5mm大の砂粒を多量に含む。焼成普通。淡褐褐色。体部外面、口縁部内外面に赤色顔料塗彩の痕跡あり。ほぼ完形。
	37		口径 17.9	47	1~2mm大の砂粒を多量に含む。焼成良好。赤褐色。口頭部のみ。
	38	弥生土器 甕	口径 26.4 最大胴径 34.8 器高 41.6	30·47	1~2mm大の砂粒を多量に含む。焼成良好。明黄褐色。外面赤色顔料塗彩の痕跡あり。完形。
	39		口径 15.3 最大胴径 18.5 器高 22.5	30·47	1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成良好。暗褐色。外面煤付着。ほぼ完形。
	40		口径 13.5	47	1mm大の砂粒をわずかに含む。雲母多く含む。焼成良好。淡黄褐色。口頭部のみ。
	41		口径 (17.3)	47	1~2mm大の砂粒を含む。赤褐色の粒子少量含む。焼成良好。褐色。口縁部1/2。
埋土	42	弥生土器 高 壱	口径 (16.4) 脚径 (10.2) 器高 (9.0)	47	1mm大の砂粒を多く含む。雲母わずかに含む。焼成普通。淡赤褐色。外面、壺部内面、脚部内面赤色顔料塗彩。風塵有り。壺部3/4、脚部3/4欠損。
	43	弥生土器 甕	口径 (10.8) 最大胴径 (10.5)	47	1mm大の砂粒をわずかに含む。雲母の繊維を含む。焼成良好。黑色。外面、口縁部内面赤色顔料塗彩。口縁部~体部片。
7号住居 P 3	44	弥生土器 甕	口径 (16.1)	48	1~2mm大の砂粒を多く含む。赤褐色粒子わずかに含む。焼成良好。暗灰褐色~淡褐色。口縁部~体部片。
9号住居 床面	45	弥生土器 甕	口径 22.8 最大胴径(26.6) 器高 (31.0)	48	1~4mm大の砂粒を含む。焼成普通。淡褐色。ほぼ完形。
	46		口径 16.7 最大胴径 18.8	35·48	1~2mm大の砂粒を含む。焼成良好。淡橙褐色。体部下半~底部欠損。
10号住居 床面	47	弥生土器 甕	口径 16.6	48	1~5mm大の砂粒を多く含む。焼成良好。淡灰褐色。口頭部のみ。
	48	弥生土器 甕	口径 15.4	48	1~3mm大の砂粒を多量に含む。焼成不良。淡白褐色。外面わずかに赤色顔料残る。口頭部のみ。
	49	弥生土器 高 壱	脚径 (12.7)	48	胎土精良。1mm以下の砂粒多く含む。赤褐色粒子多量に含む。焼成良好。内面淡白褐色、外表面淡赤褐色。外面赤色顔料塗彩。壺部片。

鉄製品

(cm: ()は残存値)

出土位置	No.	名 称	長 さ	幅	厚 さ	頁	備 考
1号土塚墓	F 1	鉄刀子	全長 刃部長 茎部長 (8.6) (4.8) (4.2)	刃部幅 茎部幅 1.9 1.45	刃部厚 茎部厚 0.2 0.3	21	刃部薄く、幅が広い。
3号住居 北西区 -	F 2	鉄鎌	全長 身部長 茎部長 (5.8) 5.0 (0.8)	身部幅 茎部幅 1.2 0.8	身部厚 茎部厚 2.0 2.0	26	先端部細く長い。上方にそり上がる。
5号住居 南西区床面	F 3	鉄刀子	全長 刃部長 茎部長 (13.2) (7.8) (5.4)	刃部幅 茎部幅 1.05 0.8	刃部厚 茎部厚 0.35 0.3	30	統彫みで関部不明瞭。
8号住居 北東区	F 4	鉄鎌	身部長 (2.9)	身部幅 3.8	身部厚 0.4	32	鍔身部上半片。断面両刃平造。
9号住居	F 5	鉄斧	全長 4.4	刃部幅 茎部径 2.3 2.1×1.4	刃部厚 0.2	35	小型の鉄斧。ほぼ完存。
10号住居 中央ピット P 7	F 6	鉄鎌	身部長 2.5	身部幅 2.0	身部厚 0.2	36	鍔身部片。頭頂の可能性もある。鍔身平面三角形、断面両刃平造。
10号住居 北西区	F 7	鉄鎌	全長 身部長 茎部長 (8.75) 1.65 (7.1)	身部幅 茎部幅 0.8 0.7	身部厚 茎部厚 0.2 0.45	36	長頭鎌。鍔身部上半欠損。鍔の可能性もある。
10号住居 北西区	F 8	鉄鎌	茎部長 3.8	茎部幅 0.5 ~0.35		36	茎部片。上下とも欠損。F 7と同一個体かどうかは不明。
10号住居 北東区	F 9	鉄刀子?	全長 (3.7)	幅 1.35 ~0.95	厚 0.25	36	厚さは一種であるが、幅に違いがある。細い側は完存。断面平造。刀子茎部の可能性がある。
10号住居 P 4	F 10	鉄鎌?	全長 (5.15)	幅 1.0	厚 0.5	36	頭脚らみ著しいが鍔身部の可能性がある。断面両丸造。

玉類

(mm)

出土位置	No.	名 称	長 さ	径	孔径	色 調	頁	備 考
5号住居 南東区床面	J 1	碧玉製管玉	6.8	2.8	0.8	暗緑色 光沢なし	30	非常に細いもので短い。硬質。両面穿孔。
10号住居 南西区床面	J 2	碧玉製管玉	19.3	4.6 / 4.1	2.0	淡白緑色 光沢なし	36	断面正円形ではなく歪つて、上下面の直径も異なる。硬質。両面穿孔。

IV まとめ

両長谷遺跡は、大山から北に派生した久米ヶ原丘陵先端と四王寺山山塊との境を南北に延びる谷の最深部に位置する、弥生時代末期に營まれた集落と、古墳時代末期の小型の横穴式石室を主体部とする古墳群である。発掘調査の結果、検出した遺構は、古墳8基・石蓋土壙墓1基・土壙墓4基・竪穴式住居12棟・掘立柱建物1棟・貯蔵穴6基・落し穴7基・溝状遺構2条であった。

古墳群

調査区南側の急斜面で、標高37~44mの間に8基の古墳を検出した。全ての古墳が畠地造成による大きな掘削を受け、墳丘の盛り土を残すものは皆無であり、石室石材のはほとんどが抜き取られていた。8号墳を除けば、周溝と石室掘り方の検出であった。

周溝 調査した古墳中周溝を検出したものは、1・3・4・5・7・8号墳の6基である。周溝断面は、5号墳がV字状を呈するほかは、全て立ち上がりが緩やかなU字状を呈するものであった。古墳群は斜面上に位置しており、いずれの周溝も斜面の高い側のみ多角形気味にめぐらし全周しない。周溝の規模は、幅0.4~1.15m・深さ0.1~0.2mを測り、比較的浅い。周溝形態は、主体部主軸延長線上が角張り両端が内寄りになるもの2基(4・8号墳)、主体部主軸に対して直角に辺をなすもの2基(1・3号墳)、不整円形だが全体に角張り氣味のもの2基(6・7号墳)がある。墳形を復元すると、方墳(1・3号墳)、円形に近い多角形墳(5・7号墳)、主体部主軸延長線上に角をもつ多角形墳(4・8号墳)である。主体部主軸延長線上に角をもつ多角形墳は、取木3号墳²¹⁾・一反半田3号墳²²⁾にもみられ注目される。

主体部 8基の古墳のうち、主体部を検出したのは7号墳を除く7基で、全て南に開口する横穴式石室である。石室石材はほとんど抜き取られ基底石片がわずかに遺存していた。石室石材は、ヘギ石と呼ばれる板状折衷をもつ安山岩の薄い板石を用材としている。比較的遺存度が良好であった8号墳では、奥壁が内傾しているものほぼ元位置を留めており、玄門石および両側壁の基底石が遺存し、玄門部には閉塞石が遺存していた。これらの状況から、主体部を消失している7号墳も横穴式石室であった可能性が高く、両長谷遺跡の古墳群は全て横穴式石室を主体部とする古墳群であったと考えられる。推定される石室の規模は、玄室の長さ1.45~2.1m・幅0.7~1.4mと比較的小型であり、平面形は5・8号墳が正方形に近い長方形のほかは全て長さと幅の比率がほぼ2:1の長方形を呈する。

本古墳群の石室構造の類例として、取木遺跡・一反半田遺跡があげられる。立地(谷に面した南斜面)・規模・石室構造・用材・築造時期などが類似する。古墳群の周溝を含めた墳丘規模を比較すると、取木(直径6.8~9.6m)・一反半田(直径10.0~11.6m)・両長谷(東西4.2~6.1m)を測る。玄室の内法の面積を比較すると取木(0.98~2.72m²)・一反半田(2.34~3.97m²)・両長谷(0.93~2.90m²)を測る。ほぼ同時期に築造され、形態的に類似するが、規模的な差異がみられ、特に墳丘・石室の規模に着目すれば、両長谷遺跡は小型である傾向が指摘できる。

出土遺物 8基の古墳のうち土器が出土したのは3・4・5・8号墳の4基であった。副葬品は検出されなかつた。掘削のためほとんどが流出しているが、なかでも比較的多く出土したのは8号墳で、玄室内より壺蓋2・壺身2・羨道より壺蓋3・壺身1・高壺1・平瓶1・装饰須恵器1が出土した。装饰須恵器は復元すると子持器台となり、壺底部内面はほぼ水平で中に小型の蓋壺・壺・高壺・平瓶がそれぞれほぼ等間隔に配置されていたと推定できる。子持器台は、通常壺口縁部上または口縁部よりやや内面に配されるのが普遍的であるが、8号墳出土の子持器台は、壺底部が平坦であり底面に配することを意識して造形されたと推測され、管見する限りこのよう

な形態は全国に類を見ない。倉吉における子持器台の出土例としては、野口1号墳³⁾で2個、クズマ3号墳⁴⁾で1個知られているだけである。また、上野遺跡⁵⁾では土壙に丸底子持壺5個、脚付子持壺20個が方形に並べられている状態で出土した。古墳の規模、石室形態は小型であるにもかかわらずすぐれた須恵器を有していたことになる。

古墳群の形成 古墳から出土した須恵器の時期・占地を含めて古墳の変遷を辿ると、おおむね7世紀中頃に8号墳が築造され、ほぼ同時期に5号墳、次いで4・3号墳、2・1号墳へと続き、急斜面上を谷に近い低い側から尾根筋に向かった高い側へと築造されたと推測される。これら古墳群は、古墳間の間隔を約8~15mほど保ち、ほぼ等高線上に並行に列をなして配列されている。これは、今回の調査で明確に検出することができなかつたが古墳の築造された時期・配置等より墓道を復元することができると思われる。

住居

調査区の丘陵尾根上に堅穴式住居を2棟検出した。1~5・8号住居は比較的遺存度が良好だが、6・7・9~12号住居は、耕作機械による掘削が床面にまで及んでいた。

時期 おおむね弥生時代後期後半と推定され、出土遺物からみるとほぼ服部I期から上種第5遺跡⁶⁾の時期にあたる。

規模 10号住居が46.2m²と最大で、次いで1号住居が31.5m²、3号住居が7.3m²、2号住居が4.3m²と最小である。2号住居は床面に焼上面が認められたため、住居として扱っているが比較的小規模な点で、上種第5遺跡にみられるような長方形プランの貯蔵穴である可能性も考えられる。切り合い関係があるものは、6~7号住居、9~11号住居で、6号住居を7号住居が、11号住居を9号住居が壊して建てている。8・10号住居は建て替えによる拡張を行っており、住居間の距離も近接していることから2時期にわたって継続している。

平面形 不整円形・隅丸方形・六角形の3つのプランが存在し、不整円形は7棟（3・5・6・7・10・11・12号住居）、隅丸方形は3棟（2・4・8号住居）、六角形は2棟（1・9号住居）であった。主柱穴は4本から6本で比較的壁に寄った位置にあり、柱穴間に間柱を設けるものも存在する。中央ピットからのびる間仕切り溝をもつものも存在する。住居の建て替えがあるのは8号住居で、方形から五角形への建て替えがあり、さらに住居の北東隅から南東隅にかけて床面が三日月状に一段高くなる屋内高床部をもつ。10号住居では五角形（推定）から六角形への建て替えがみられる。

焼失住居 2棟（5・9号住居）で、比較的多くの炭化材が遺存しており、良好な資料といえる。鑑定の結果、5号住居の炭化材はモクレン属、9号住居の炭化材はシノキ属・モクレン属・ヤマグワであった。これらの住居は、比較的強度な建築部材を使用していたことが判明した。また、3・4号住居出土炭化材については、出土状況から用途を限定することは困難である。

出土遺物 後世の掘削が著しいため、12棟の住居から出土した遺物は比較的少なく、弥生土器・鉄器・玉類・石器であった。中でも弥生土器は、在地系の土器と共に、非在地系の土器の存在が明らかになった。非在地系の甕と高坏が調査区の南西隅に位置する10号住居から弥生時代後期後半の在地系の土器と共に出土した。甕（48）は、厚手のくの字口縁で粗いつくり、口縁部から頸部にかけてほぼ完存し口径15.4cmを測る。高坏（49）は脚部片で、赤褐色の粒子を多量に含んだ緻密な胎土で、色調は淡赤褐色を呈す。復元した脚端部径は2.7cmを測る。外面は赤色顔料を塗彩し、二孔一対の透し孔を3箇所穿つ。高坏については、服部遺跡4号住居⁷⁾からも同様の高坏が出土している。両者とも吉備系の土器の様相を呈している。碧玉製管玉が5・10号住居より出土している。特に5号住居出土管玉（J1）は小型で非常に精巧に造られている。鉄器は、3・5・8・9・10号住居より出土した。9号住居からは、小型の鉄斧がほぼ完形で出土した。10号住居は、鉄鎌3・刀子1・鉄鍔1など多く出土

した。

今回の調査では掘立柱建物は1棟しかまとめることができなかつたが、1号住居付近にはビットを多数検出しており、各住居には貯蔵穴が、また高所には共同の施設として倉庫群が形成されていた可能性がある。

以上、両長谷遺跡で検出した古墳群と住居について、その概要を整理しまとめてみた。多くの問題点を残すところではあるが、非在地系の土器が共存する弥生時代後期後半の集落を明らかにし、上神古墳群に始まり、取木遺跡・一反平田遺跡を経て四王寺山西沿いの谷に面した斜面の最南端にあたる古墳群を解明することができた。また、今回の調査では装飾須恵器の新例などこの地域の新しい資料を得ることができた。今後は未解決のまま残された問題が、将来予想される周辺の調査によって解決されることを望む。

註

- 1 梶鈴輝雄他「取木遺跡・一反平田遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1985年
- 2 註1と同じ
- 3 梶鈴智津子他「野口遺跡」「倭文遺跡群発掘調査報告書Ⅱ」 倉吉市教育委員会 1988年
- 4 梶鈴智津子「鳥取県の装飾須恵器」「第15回山陰考古学研究集会資料」 1987年
- 5 名越 勉「上野遺跡」「四王寺地域遺跡群遺跡詳細分布調査報告書」 倉吉市教育委員会 1982年
- 6 梶鈴智津子「上穂第5遺跡発掘調査報告書」 大栄町教育委員会 1985年
- 7 置田雅昭「遺物誌」「鳥取県倉吉市辰部遺跡発掘調査報告書」 倉吉市教育委員会 1974年

参考文献

- 田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年
萩本 勝「須恵器について」「陰田」 木子市教育委員会 1984年

V 鑑 定

両長谷遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

倉吉市では、これまでに主として焼失住居址から出土した炭化材の樹種同定を中心に、住居構築材の用材選択のトドケが明らかにされている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1990、1991、1992；未公表資料）。それらの結果では、暖温帯常緑広葉樹林の主構成種であるアカガシ亜属やシイノキ属、その二次林等を構成していたと考えられるコナラ亜属コナラ節、クリ、ヤマグワ等が比較的多く確認できる。しかし、遺跡の立地環境、住居址の形態とその時代・時期などによって種類構成に差異があるか否かを検討するには資料が充分に収集されていない。一方、木材以外の植物利用については、中尾遺跡および夏谷遺跡で種実遺体の同定が行われており、モモ、マメ科、ブドウ属一ノブドウ属、イネ等が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1992；未公表資料）。

本報告では、両長谷遺跡の弥生時代末の焼失住居址から出土した構築材と考えられる炭化材の樹種を明らかにし、当該期の用材選択に関する資料を得る。また、住居床面から出土した炭化種実遺体の種類を明らかにし、当時の植物利用に関する資料を得る。

1. 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、弥生時代末の4軒の住居址（3号住居、4号住居、5号住居、9号住居）から出土した炭化材9点（試料番号1～9）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

(2) 方法

木口（横断面）・粧目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

表1 炭化材の樹種同定結果

CNo.	出 土 位 置	時代・時期	用 途	樹 种
1	3号住居 北西区	弥生時代後期後半		シイノキ属
2	4号住居 北東区	弥生時代後期後半		ハイノキ属
3	5号住居 南東区床面直上焼土上	弥生時代後期後半	住居構築材	モクレン属
4	9号住居 床面直上	弥生時代後期後半	住居構築材	シイノキ属
5	9号住居 床面直上	弥生時代後期後半	住居構築材	シイノキ属
6	9号住居 床面直上	弥生時代後期後半	住居構築材	モクレン属
7	9号住居 床面直上	弥生時代後期後半	住居構築材	シイノキ属
8	9号住居 床面直上	弥生時代後期後半	住居構築材	シイノキ属
9	9号住居 床面直上	弥生時代後期後半	住居構築材	ヤマグワ

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材はいずれも広葉樹で、4種類（シイノキ属・ヤマグワ・モクレン属・ハイノキ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に示す。

・シイノキ属 (*Castanopsis* sp.) ブナ科

環孔材～放射孔材で孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。柔組織は周囲状、散在状および短接線状。

・ヤマグワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で孔圈部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II～III型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・モクレン属 (*Magnolia* sp.) モクレン科

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～40細胞高。

・ハイノキ属 (*Symplocos* sp.) ハイノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～5個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段は多数。放射組織は異性II～I型、1～3（4）細胞幅、1～20細胞高であるが時に上下に連結する。

(4) 考察

住居構築材と考えられる炭化材は、シイノキ属を中心として4種類が確認された。ハイノキ属を除く3種類は、これまで市内の遺跡で行われた調査（パリノ・サーヴェイ株式会社、1990、1991、1992；未公表資料）でも住居構築材に確認されている。これらの結果から、本遺跡においてもこれまでの調査事例と同様の用材選択が行われていたことが推定される。

住居址別にみると、3号住居ではシイノキ属、4号住居ではハイノキ属、5号住居ではモクレン属、9号住居ではシイノキ属とモクレン属がそれぞれ確認され、住居址によって種類が異なる傾向が認められる。このような例は、市内の夏谷遺跡などでも確認されており（未公表資料）、本遺跡でも住居址によって樹種構成が異なっていいた可能性がある。

2. 種実遺体の種類

(1) 試料

試料は、3号住居から出土した種実遺体1点（試料番号10）である。

(2) 方法

肉眼および双眼実体顕微鏡で、試料の形態的特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

種実遺体はモモであった。以下に形態的特徴の記載を記す。

・モモ (*Prunus*)

核の破片が検出された。表面はあらいしわ状となり、縫合線の一部が確認できる。

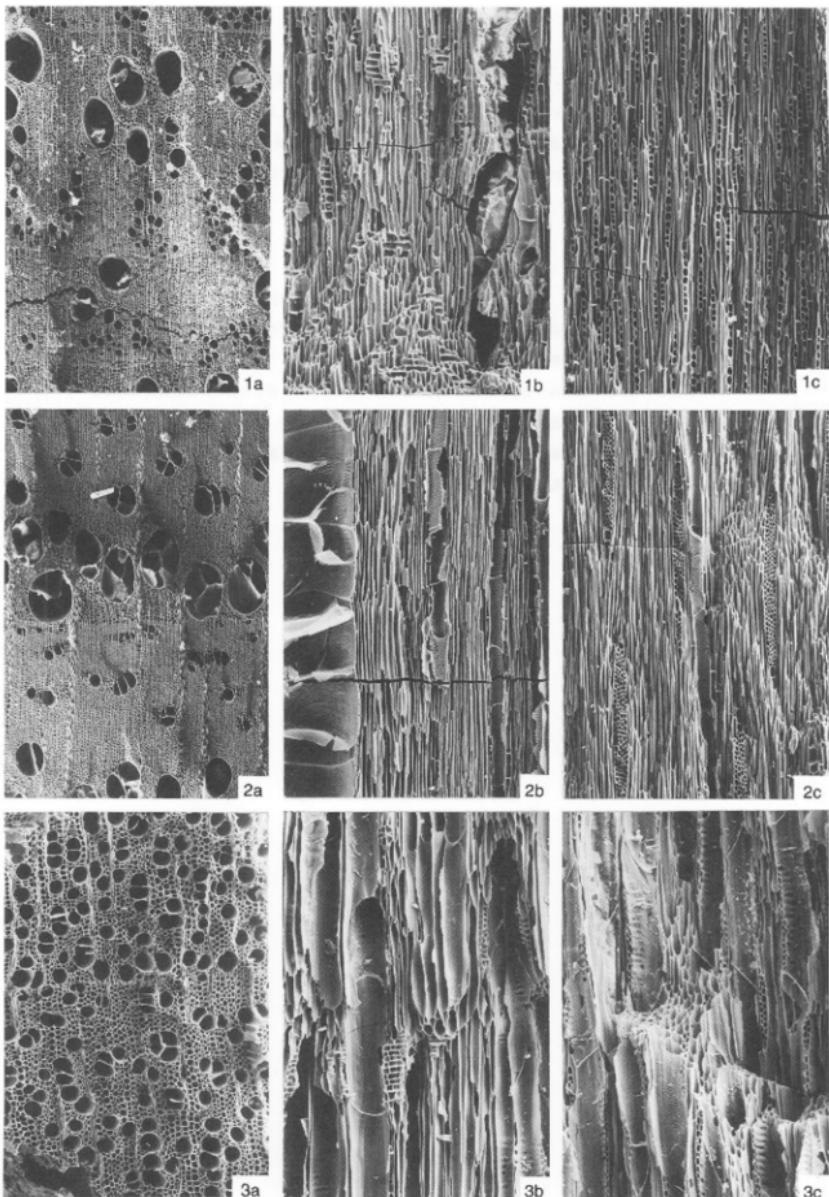
(4) 考察

出土した種実遺体はモモであった。モモは中国から渡来した栽培植物と考えられている。その渡来時期に関する詳細は明らかではないが、最も古い出土例は長崎県伊木力遺跡から出土した縄文時代草創期の試料とされている。(粉川、1984)。市内では、中尾遺跡で弥生時代後期の住居址からモモの核が出土している(パリノ・サーヴェイ株式会社、1992)。これらの結果から、本地域では少なくとも弥生時代にはモモが栽培されていたことが推定される。

1

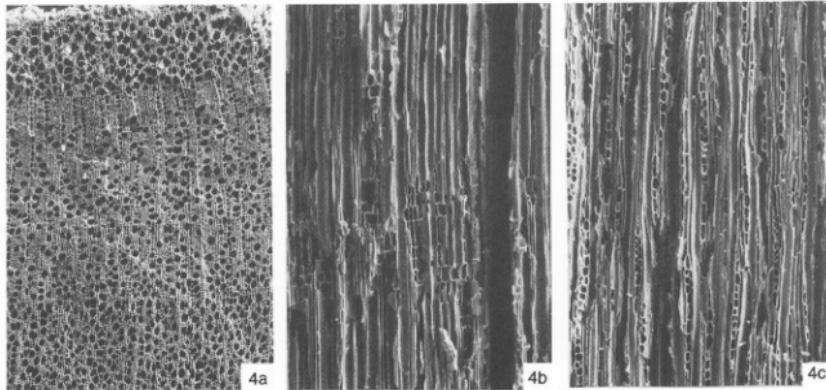
〈引用文献〉

- 粉川昭平(1984) 穀物以外の植物食。金間一恕・佐原真「弥生文化の研究2生業」, P.112-115, 雄山閣。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1990) 大仙峯遺跡1号住居址出土炭化材同定について。倉吉市文化財調査報告書第60集「立籠遺跡群V大仙峯遺跡発掘調査報告書」, 倉吉市教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1991) 漆根後谷遺跡住居址出土炭化材樹種同定について。倉吉市文化財調査報告書第61集「立籠遺跡群VI頭根後谷遺跡発掘調査報告書」, p. 1-11, 倉吉市教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社(1992) 炭化植物の同定と炭化材の¹⁴C年代。倉吉市文化財調査報告書第69集「中尾遺跡発掘調査報告書」, p.130-140, 倉吉市教育委員会。



1. シイノキ属 (試料番号5) 2. ヤマグワ (試料番号8) 3. モクレン属 (試料番号3)
a : 木口, b : 板目, c : 板目

200μm : a
200μm : b : c



4a

4b

4c



5

4. ハイノキ属 (試料番号2) a : 木口、b : 稚目、c : 板目
5. モモ核 (試料番号10)

■ 200μm : 4 a
■ 200μm : 4 b, 4 c
■ 5

210.2
Kur
(89)
図書館

報告書抄録

書名	岡谷市遺跡発掘調査報告書						
著者名	——						
卷次	——						
シリーズ名	岡谷市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第8集						
著者名	岡本智郎						
発行機関	岡谷市教育委員会						
所在地	〒482 鳥取県岡谷市西町722番地 TEL.055-22-4419						
発行年月日	西暦1996年3月10日						
所収遺跡名	所 在 地	コード 市町村:遺跡記号	北 備	東 備	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
岡谷遺跡	鳥取県岡谷市西町字岡谷	31203 : 4 DKR	35° 26' 24"	133° 46' 41"	1995.02.22~1995.03.29	7.671	産業廃棄物処分場造成事業に伴う季節調査。
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
岡谷遺跡	古墳	古墳時代	古墳 石室土塁基 土築基	8基 1基 3基	須恵器 須恵器	横穴式石室埋立基を出土。 8号墳周辺より4種の小型土器を配する須恵器型土器(子持台)が1個体出土している。	
	墓	弥生時代	土塁基	1基	弥生土器・铁刀子		
	集落	弥生時代	土塁 堅穴式土器 壁立柱建物 貯藏穴 陶灰渣	6基 1根 6基 2堆	弥生土器・铁刀子・铁鎌・铁矛・碧玉管筒瓦・砾石・磁石		
	土塁	縄文時代	落石穴	7基			

両長谷遺跡発掘調査報告書

平成9年3月19日 印刷
平成9年3月19日 発行

編集 倉吉市教育委員会
発行

印刷 勝美印刷株式会社
製本